横画考法

ホ 2
4304
5冊

ホ2
4304
巻 5

故
先光清風氏
大正十三年十月
三月
先光華氏
寄贈

和泉式部日記 伊勢物語 源氏物語 枕草子 紫式部 清少納言 和歌 平安時代

○義

こと　きとれたなし　はめて流る義　こと　方二神のこと面　日三ゆ門　日六こけくに　日九こと坂　日十六こさと乃如こと　日十土体言　日はる　日サル楯　日こよ　神こと

こと　見こ　日伝説紀　こうぼう　日ふこと　日最高紀　やま　こと山こ　谷こ舟こくま乃こ義　こと　こへこ　こうぼうこと　日十七このこ　やけく　日十九こあきこめ　日百こ　こと　日二久こ　けあ　こと　ちふつせ見　こ　ちきこと　こと　こかれほし　こと　こと　こと

神風のいせの海をゝもあらあひをつるかも。月十七 杜の田のほむきえんてりかりきこうふさ
たをりけるをゝなゝしハも。月十六 ひしほひるつき金て細をかもわれるなな
ゝをもちて 言字持し。方二 ゝをもちてかゝしく。月八 花のつゆのうちるるくさのごとくもら
かゝてをゝまけらしやや。古司 ゝさくる 人放し。方 ゝもゝさけむ山をゝるな
くゝ人目とりゝとゝ。月三 ゝひさくるやかちゝゝのゝきゝ。後紀 家京
永久 発時 語曰朕大長 誰かかも我語 比伝 学年 就かも我同比伝学年止ゝ。おゝて
ゝをやりゝのかゝかして 今見ゝ。方十七 ゝて ゝゝ花のさゝりゝゝおひ
恨の将 をやるをゝ ゝめ ゝしめとゝ。月三 妹をゝ ゝゝ
とゝ。月十 ゝめゝ花ちりを ゝかきゝのをちゝきると 経物端 載ゝ。方
くゝまてゝし ゝゝあちけ ゝ
五 ゝちかきゝのをゝゝきゝとゝ ゝゝゝ。月 詞書 付年七十有四 髪黄
髪 沢白 節力 延 羸 不但 年 老 復 加 勤 務 誘 曰 脩 疾 灌 頂 短 材 載 端 此 之 間

ゝゝめ 月ゝ。方七 住乃 にのかから次ゝいやゝかもなき
ちつこあれゝ 姉ゝゝゝゝゝ 志のひとゝをかる 旋 ゝたま 月 ゝ
。方五 あゝめ ゝゝまゝハやて喜さちハちゝゝやゝゝめさけたまちゝ。月十八
ゝゝまゝけて。月 祇代 恩執 又 霊。月 景行紀 皇霊之威。月 垂仁紀 神霊
ゝちをゝづねな 欲修道ゝ。方 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ ゝちゆの
む 満将往し。方二 天つちと日月とゝちゆゝむ。月九 ゝちゝ月ゝゝてるおゝワ
ゝゝゝゝ。月三 けてる月ハゝちかけしける。月十 宋 夜乃人ハ満 行ゝ。月十三 人
さゝゝゝゝちゝ ゝちかけ 盈 朔ゝ。方 ゝゝのゝゝハむゝしきおゝとゝゝゝゝ
てハあれゝゝ 月ハゝちかけ しける。月七 ゝゝゝくのゝつゝせの山ゝてる月
ハゝちかけゝゝ ゝちさのりなる 盈 盛 有ゝ。方十 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
人乃つねなき かさゝゝ。ゝちさゝりゝる杜乃 秀のゝさ
ゝつ 踊ゝ。古下 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○月十三日　さきの君をあこがれていこうこと
ぬひ　不見日　ぬひさまねこと　やひたる
つこひやまあつこたらハこうこ
都雅　ふり　京　花　風流　風雅　風雅文人ふりをよ　よへて
花とあれとこ酒こうこ　三世へてつへ　らむ　将見　ひとりこと　見　きこ　ときこ　にいや　名つ
三世往　ふ
けるわ　わ
てハ花　こや　こらくしよしも　こわこ
えらこ　こ
もこるめこつのこ　見流　こひてこ　こ
見流　こ
こ　こ
こ　こ
こ　こ
こ　こ
こ　こ
こ　こ
こ　こ
こ　こ
こ　こ
こ　こ
こ　こ
こ　こ

おもうきへこと　こと
ものすくりふなるへし　こさこの　仕
乃こさかりをこらをきをちをろこしさ谷　吉下　さかえろ　ろ
えろえちに花えちに花えちに乃さうりふ　ころき　火蒙　こ
根をりてこのふをちをちひてまをを仕ろころきてまをを月三　こちを　こ
こうきてまをを月四あをを川こうきしこうじくこ　こ
乃守こ穿をたりふこ月　へを三ここここちてつ乃つく　今和尻　間の　あこちこりこ　ぬ
そこちりかをたをを　こつ　かち　林　水洞屋　ハ
一定名なるへし　くかち　林　水洞屋　ハ
めかへりこハちしこここてこ　日　建　紀　こつくへこりこ　後　天　天　感　定　元　年
詔法多知乃祖上毋乃言来久海行波義丙久屍山行波義年波屍之り　ぬ
糸吉　死家こ　あこ　火　こどりこ　嬰児　月十八　月十三　ぬ
にも少を紙一まめをり　こ
こうちもハここむここちのこやこうちをこをこひらん　月十六　こ
うこにハこちこちこのこここここかきここきお　後　紀　こ

かゝりをるもの。

にく 醜し。万三 あなにくさうしらを次と酒のまて人をにくむいさるにかもにる。日神紀 大醜此云鞌ちふ

にたやし 耳ホ容易し。万十 ちろはいへい耳よとちにしい次くたくもろ乃ちにわゝ なりて形くる。にはきしけい

やしきやゝ

にまの 後紀 仍祢至了来美麻 乃弥已止乃。天神孫なる

にやづうへ 家住し。万一ふ

ちゝらの大こやつえあれセむやを

にやこかこびと 都万人し。万十八 乃杖れしまたまもハやしもしきろかも

けふれハれもやこつ

にゆき 行幸し。万四 わつさろつ月ちとの乃をまにも

らしこやこかこひと

きこちこ ゆきをきゐくしらも。月九 ろうこ行ハ

今こしあ

にわうふ 三輔之祝し。万八 うまさけこわのこふの山てら次

へしこ ぎの

枕乃とこちの ちらまくをしも。四ろまさけ

こわのこちのいこふききよ

につら 角髮し。上代の男乃こうひて髮を

きて飛きこにちんくこ

たたへちてつくことくいいわ物と

るこの。日神代天照大神乃髮をこときてこつらまきひさまつくを。月神

紀 髮椎のこうにて髮をとこて

洗て入洗をひてこうへさまつよこかこ自

らわこわさるまくやこてこうをゆいて髮者とし たきまこくをも伽のまれらをの乃も

かことなりたまこ。月崇峻紀 古俗年少兒年十五六間束髮於額十七八間ふて

ゐ角子今も又紀こをこの角まゆ乃こうこ。十七八の間とをハやし後のすこいこ上代

ハをへてこうやり。角まをあげまきとこ髮乃ハ後ろ。万十 角髮 たたこ角のことく

ある角かくいこ乃後世ひんつらこ。ふこつらを祢こ

にかつき 三月月し。万六 ふかさけて

。江次第 垂髮貧頰こ。和 髮 美豆良 屈髮せこ

こうつきこれハひとあえ一人の肩川わけ垂るかも。月月をて

にろき 霞し。和霞

たくこうつきけまゆ四ねうきけもくこひ一男こあへるかも

美濃紀。万十ころ きふりいこまうセふきこ

になきらひ 霧合し。日 事紀 ろにう

ゆやここ北こを夜わもひこ乃ゆ

川こなきらひ男はうまに風をさこ舟こセ

になこふな なくもれきほ四るかも。万七

有吹し。万十八こ ろこふき

なこセかねつころハうへと

雪きこえまして こ ぎの

にしうよ 短歌し。万十ほとき次きなくさつきの乃こ

しうよもひとわ一 物れいあ一かねつも

にけつくに 古食國し。万八隅しくわう大こ乃こけくにハやまもこもれな

月六 月けつくに日くのこつきとここそ。月六

みけくにハさうえむらゝと
〜そ。古食国〜

と　こうち　を体洞〜。方五かーこうちのられあうしをこうーちのこむ
や　けゝとちていもう名のりつ。をにふりはは山をこえて伐おゝ
いう山乃こと　こさう　高坂〜。方サ名ふりくせちう衣ハうめまーをこさうたらふ
むけなり　まさやうゑこしむ。月九　夜ーろ乃こさうをこゆと。月十四あし
から乃こさう　京兆〜。方五六ハ伐乃わこひちゝたたられい
たりてゝ　こさと乃かみ　そさと乃かこにいてくうとへむ。和左京職凡
多利乃義　こし
佐止豆加佐　こさきわ　こ崎廻〜。品こさきわのありうゑよれるいはへ
なこ立ても長ても家わりへるきみ

ぬつき　ゑ泥付し。方八衣ゑにこしふつくまてうゑーゆを川板つれをへま
をきるくこ。夫木ふしあや沼田のさゑ〜とる田ゑハ神もひこきら
こふつくらむ。新古今こふつきうゑし山田ゑひこえ〜てきく神ぬらん
秋ハ来ゑ乃り。水泥ハ耕土とりへるうはちゑ〜ふもとうはうゑ出し
こをなる〜。本字時珍曰溝洫流ゑ及川ゑ灌田之次多有之
瓶状ぬ泥色黄金甚脆弱〜。今山のこゝゝもみこゝゝ

こうのふ

庭園生〜し。方土ゑる日乃けちくくしあれハこうゑ乃からあゑの花乃こゝいてめ
や。月十七こうゑのふの百ゑのうめ乃ちる花のこと。催馬楽きり、次のぬこさうき
たさこうゑのふ　こちうなこ　体けく。方十七こちうなこうくゑつこかこハたひ約
にゝ　もーこうぬ君をめくこたまいた。和泉中古
こうゑ乃ゑ
乃ゑか　こちのへ　乃多くし。方土乃之乃ゑをゑせこふこからーかこ
君ゑこえぬけこう。月七ゑりこも表ふく約ゑこちのへのゆき
さうこゑ乃ふる表を。月サ乃のへ　こちうちなづて　道乃永ゑ之。ゑこゑ
乃くまらうきこゑうまあのこ　ちゑハゑ乃こ。方四ぬ
えむ乃よふへふへこよひこへれをかゑ次ゑこちうちなてを。月五つぬこうぬ乃
乃なこてをくふくこいうこゑうゆうむかりていなーこ。月サこ花乃ここゑ乃の空
に父をたきて道のこ道　こちゆきぬり　道約稲之乃乃約ゑこうゑ
ハゆきかてぬかも　ゆきぬり　ゆーこ乃乃ついてなるへー。方
土むほこの乃ゆきふりこれるこ次ゑいをおこてこふる伐かも。古今
ちくれハかかへるなりこ〜ゆこ乃こ　こちうちゆきふりにこゆてま
ゆきあひに　道之行食し。方四むほこ乃乃のゆきあひこ天ゑ乃ようのここゑウ
つ〜し。月ちむほこ乃乃ゑゆきあひてようめこもれハきこゑを

いつしらう　水姫　○方十九　うの花を　をりかけ
まくむ　こつを　水　なしらむ　かも。俗ゝ　ゝ乃出　ゝ　ゝ　ゝ
こつぼを　水粧成借有身　○方十　こつぼ　かれる　ゝ　ゝ　ゝ

かぢをとりてこぎつゝ行とゝろ〻でやさしてきつゝむ式雅俗はゝ沢山中を
零標若有舊標杭折者捜求拔去。顯昭古今注云をつくしとはこれをこる〻
たにのふかきゝ水をたてゝこまろうこをとゝ次まハろまをえてこをとゝ
ゝて舟をハのぼりくだる。お拾集伊勢物語をつくし川流もうー
あらきにまけぬ人ハあらじなゝ。六帖紀貫之をつくしこぎ
ほもかるこをつくしたれるかとなきこゝひもをるかな
こきりゑゝに袖をてちいけるゑゝ。ちゝ
。和砂一名階美岐村。韵会佛階梵也ゝ

こたや 市田屋。万三神
ちゝのきよなこ

こぎり 御。万三
お殺乃

たかやのかきゝとのゝ。神代のときにつくる市田を守る屋。万丹集四月中ゝあ
老川かものこゝ田代ろ川ゝ為て今ゝと年のかゝをいのらむ。日本紀孝
ゝやゝりけゝ子月ゝなりゝけや

ゝとろ 御宝。万三わゝやとゝゝ
をろを立てこゝらハは

いろけやさなへたひもこゝろさき
いんひへををゝこゝもゝ。ゝとろ心も

ゝやはしら 宝物。万六ゝやゝら
ふとしきゝ〻ゝ。日一ゝ

神乃宮室といへる名なるへし

やゝらふと
しきゝやハ

ゝやのぼり 宝昇。日仁徳紀つきねふ山ゝろいを文
のぼりゝ。万五うちひさに宝へのぼりゝと

たらち

ゝやで 宝出。ゝゝ乃出入を以。万二岸ゝにさゝりゝゝものを
ねぼゝゝく家出もをるうさひ乃隈田を。日大星人乃ゝる

めをつゝしさふるこみさと
を次宝ゝやて五りあり

ゝやぢ 宝路。万三やゝこゝらゝるひるといをゝ行
乃ををわれいさなゝゝやちとゝろをる。日七
内日さ次宝
波をゆくにゝ

ゝささこ 和時鳩美作古今按古用宝名字彫屬し好在記
山中亦食奥者也ゝ。日景行紀至上総玉後海路波浪
水門を時尊宝名声ゝ。万十三さこゝみるねきのあゝうにゝる波のりくへも
ゝ次わるゝふらくハ。日ゝさてあるゝ波ゝをる舟の夕波をまつらむよりハつきこ
ゝきされ。日ゝゝさこあるいゝわゝせるな
のりゝ乃ゝ。日十三さこあるあゝうゝせるい

ゝうりを 紀屋。万七庭つ
ゝりかけのゝりを

ゝつち 蛟蛇。万六虎ゝのりふるやをこえてちゝ国ゝゝつちゝゝり
をのゝ
こむつるきゝちもか。和蛟美豆知彩屬し山海経蛟似蛇而四
脚池奥酒ゝな古加

ゝやこどり 都を。万廿舟きゝ行ゝ坂にの川のゝなきハ
蛟来為之長ゝゝ
ゝゝあゝゝあゝきゝ田を乃大きなるゝ乃とゝあゝひていをゝゝゝ宝ゝハん
えぬとりなれいゝお人ゝゝらゝゝわゝゝゝとりゝゝゝひけをハこまなむ教なる

と以をきてゑ〻ーれたりいさてくいむ
れるりわりふひとくあり中なーやと　こづどりのをちりいろぎし
ゑをえををゑ。あるい係ゑゑ。ゑりとりなれいかくいり。月廿ゑりとり　えくさ　水草なり
ゑりとちれいるきにちをゑゑのいたれきるていまろくやーき
○月三いにーへりふるきつえい年ふうき池のなきちゑえをせえけり　えつえ　瑞枝なり
○月十五されいえくさりえゑれくゑ宮りけてもふいてひわるかも
瑞枝ゑりふゑをもーーゑつくーーきをり。月六え
ふゑの山ゑをつえさーに月十三いつきう枝ゑつえさに　こづのげぐさ　あ信ゑ宮ゑ山限ゑせるゑさをゑ
○月十天河あるけくさの枝風ゑなひくをえれいけいきぬらー。月十五　えら　蕤　日神武紀
山河りゑ信ゑせる山草りやきいもいもうなるほゆるかも
かきををにあいふゑいかえらつをとをうりのうをとろゆめつなきてうをてーやまむ
○月十四きいつくりをうりくゑゑらいきつあをとうもゑをのふせををつまきぬりりにら
といえる　水れし。月十五ゑるりこりことわけされるかふのええ　えををあー
へを　○ところものやふきさうれるをえるにををへて又
湊葦ゑ。月十五をを　あーゑまーきる茶のをり　うけ。月十六つうけいえーほ
くちの人ゑをりぬりりをとれをひ　りをや。和稟鹿

日鹿　ホカ加無　今業俗謂稟鹿戻乃味字是
○字後船　三ヵ。赤ひーほとい〻へるれなるべし　えき　御酒之。日崇神紀こりえき
太ゑりりりかえーえきいくひさい。月神功紀をりえきいりつえきをなりえりりの神をを
ゑゑいきんいえたゑ次をくをえ神りりー誓保きはきををほーかむほをはきるほ
ーまりりうーえきりあさ次をセさて。月應神紀かーのふにりゑ次をつりりゑれ
にかゑる在保えきうまりにきりりをちをセまりりち。古中を、ゑりりかうーえき
にれれ五ひえけりことをりりーをりーれあひえけり。月五かりりくにてゆを
たりりてかへりてむまをりりけをまえきをてまる。月六れ飲酒りけをてえきハ
えわ。和神酒　美和。月二ちきさハりりにえりりをえいのれりりりたれいちりひをり
ーわ。月十三いりりりをわををまりる神ぬーのりりりのむかけれいりりーも
えけー　出衣之出着之茶色。音上ぬえたまりくりきえけーをまりふさにりりよ
りひーをりりふりりのちきえけーをまりいさにりりりりひえ。日推古紀衣
裳。月十四りくりまりえにひくえまりりきぬハあれと君りけーくあやにきけーも
○月十五りりりりりりりりりあまのりりりりりりりり

くいたるいろかるれひろ
むかしこの帯ちはハ絡とる　しへむ　三宅了積之。方四つ竜のいもも
くつろいハちりぬ。月三ちつなき意をしー次きハ常乃れひをらを竜むちふ〳〵くりの九ハ
ちりぬ。月九つを少帯をこを竜少ふ〳〵ーきにこ。ちる。遊仙日〻衣寛釣〻帯綬
。男ひよりセ　うつあひ乃いと　三合之糸之。方四わりをるうつあひよりれる糸もち
たるをり　てつけてまーよの今ろくやーき。日彦絡紀　山石
清園乃内宿家殆ぬ之絞之綱　ミツヨリ
。出雲風土記　三身之綱市掛豆　こかさ　はんちこ。日神功紀　鼠風名記帝笠墮風故時人
蓋こ。方土ろ之こかさよぬ〳〵るありまちけこ。月三こな人乃ふきにぬふてつありま麦
。月六徐うてにわりに月いもりきるこふを乃山よかりれ〳〵りけり。月八ゆちのこうを山
乃をこ　こ〳〵たゝ　こ　團之為之。方三わつる山こ〳〵たーてをちあち
ちを〳〵　こ　ちる　ーぬれこ。ちる。これハ葬送の時乃こ〳〵をり
こ　ちる　俗之。日神代　ありをるやれとたるりをうなら
をるむのこ次まる乃あるむえやこ月ふ竜男多小其頭所野五石
角市徒之瓊こ。方十ちるむ乃　こてくら　佛帯彦之。方三　みてくらをちら
いほてくをひをきをこ　りいてくこ。ちる。和帯ミテクラ

古上市帯　ことらー　市執之手之〳〵をたまふをり太乃ハえきたまふちの
少を之えりセとり衣ハきとまふよりをこけーーを
に月ー。方一ことらーのあつさ
乃らのあらを次のあれえこ。ちる

○む

むかへ　迎之。方十きころひきけならくなりぬ山ちのむう竜ゆうむまつにハまと
ーー。方六山こつりむえまあてむきこうきまさハこちる。月八ところの吉あ
むう舟こきつらーあーりかりにきわけとるハ月九むこぬるむい　むうふ
次　向伏之。方三向をりたるふりふりもををけむうふにむのこちる。月三あまやの
むうふにくこ。月五あまをりむ　むうふ次きえこ。日神功紀　あまをる
むろ姫こ。むかひて　こをきをりふなるへし　むうさくる　向放之。むひてーほさるをり。日綏代紀
むうさくるいきりわをを　をめつらこきをる　むうき　むうハまほーきてふこえるるへー。方六白む
りいほつ〳〵ひををまるむにひねこやむあま

はむ〜くもあるう。日神卯花欽感。後紀天平勝宝元年宣命字年かえ期美
〜〜。日其人の字弟仁志改すい。霊異記喜。日本紀受寿紀いさをーくたし
きかるのれむ〜さとてう
ひろ名も名はたまひー

むきとち 向ち。万八あまのかいあひむきとて わうてひー乃きまれなりひとき

まけ な

むけをひらげ 向平し。日神代よ平をもむけとまり。万五かこ
ろくもた 乃ることからくにをむけたひらけこ。日十三ゑ極
むけにとこ

むけ 庭こ。日神代 ムスビノ 高皇産霊。万一の上の ゆついたむらにこは
むさん弟よもかも昭とをとめにて。日七たく山のいなよてけむ
しかーこと思ふらうをいるかもせむ。日二妹うゑいちよになるもむひめーまのふ雲う
うもえてけむにまてに。日十三神なひのこむろの山よかくれる行ーをきむやっけ

むけ 向

まてに

むけぼき 結在こ。万八たつなくかこいの芦の根も
ころ〜れとひむけはれなけきワ〜こ。

むをびせむ

結ゐこ。万十二ひむれひせむあいむ日まてに
日十六いきもちまも日ー人〜むをひてー

むをびてちうつ 掬而呑し。万十い
ちーるとるこの
うを むれひてのこつ。古今神ひちてむれひー

むる 共ち。万二ゆえふる涙ころき
ゆ乃こけれるをまうけふの瓜やくくらん れ涙のむとかかりかくり

日三涙のむとをひくむもりかこと ひユこ。日十五瓜乃むとなせくるちこにさり
もるこ。日三ゆこれは見ころきこれをなりのむさかりうくくり。いさお

むき 抱こ。万十四かこつけりあ ちうりうりまるもらかきもきぬれとあるぬをあ
とうあうせひ。日六たひらけくわきはちろはむをもきてわれいさむ

むせ 噪こ。万三ゆきかこうるう一物のきえるこにんむせワなるこ。日四
ちろこ乃神ワるへき口をちうこてろにむさひ神のこ一ちろる。行ゆん

加

むをこと 空こ。万十むるこ乃をこ
噎 。むるーき言かて祝の名をこしなかれこ

むら 群こ。古上むこ
いちハこ。万十九ワやとのいさ〜むち行ふく風のれとのかろけきこの火へるも。日十四
かこつけのわうのさ神むら。日むらー乃高。日六むらーりのあさを行ハ。日十夜くさ
にむら雨ふりて。日一やまとにハむら山あれこ。日九うちもれ。日二むらきこ乃
ころ。家称集きりー次てをきさやこハなきをれハむーきぬをるわれハき

きれ

むきーき 空こ。万三世乃ちうハむふーきよとあむこ

むうーの

ろに ろこのてるつきいこちうけーけ乃

ひと 昔人こ。万十ゆうつをりくこときるこにりさくむーのひーれをほゆる
かも。古今さつきまつ花をちえをの香かけハむーの人の神の香ろ依る

むつをは 釈魂之子しく佐乃あをりと。方言ねぼきしのむつたるあへや四て
國の境乃山を言と定る。日本つくるものをてこのもにえりへ
きあてそるとれと。生まろあひえれる。日本たるへいろひぬるようをい。日本紀
ゑあをく君きまれやとい。日本紀 むは祈ろきの方言穴戸ゑい。古今 枕の花
にやとりハをへしをしをへしあを むなわけ乃ひろき 胸脇之廣し方九
むつきしたひちらなくに むなわけ乃ひろ
きわさもいい。楚辞 傍四得先 むなつけ 胸おし廣のもにてををわけりをり。方言八さ
かりのもいぬる。塩石 紀象にうつるひぬへ
さをしゑのむろわけまをる枕乃えきりろ む祢ハわ巻て。方言きてしりり
物をおりへハわろ
徇ハれてるけてとんをし。日ぬてものぬておりへのを男ひをさけいむ
ハやむときもし。日 夜乃ほとろ出てくらくあまくひなれハわろもきかやをを
日十九月の三れの雨乃山男に む祢うちなげき 胸打数し。方言む祢うちをけ
けふきわろも誰をとハやすも きをにをとるわることをつ
世の中 むつき 四月之。方言むつきしもち出乃きしらハかし
乃乃 むかつを 仰家し。日 むろ
てろうをてたのきをへめ 皇極紀

ををこてるやらう柔和ころい。方言むろををこてるとの物ちりぬやしらやろさしめ
くなるろろあり。日 白五乃乃かつの木をつえり花まついまにちけきつるかも
日九 白雪のあの花もををまーをを むきそむこは 麦繋的し。方言うををこし
日八 雪白ひをつをくひをくへいをを むきそむこまの乃られ
ををほーをらくを男ひをつも。日四 むさくひ 鼯鼠し。方言むさくひいあれと
をへをうに麦をむこまの乃をつくにを くむくわーリ乃山のさつをに
あひをけるかも。日六 まをらを乃言国山をせめをれハ男をおりくるむさくひろうれ
自注下 ろをり。日七 三國山求めををまへ乃をまつをこと乃れまちやをむ。オ二巻自
注獄多俗曰年伏し蝿。和 鼯鼠毛義 俗云無伏し比。本草山中にてをくとををーー。薬名
花云代如猿而肉翼似蝙蝠後しる而下不能従下而上常食火烟声如小児者也。本雅
云鼯鼠は多小狐似蝙蝠肉知し尾頂翼毛紫赤色背上茶色腹下黄啄頷雑白
脚短爪長尾三尺許飛且乳亦得之元生声如人呼食火烟能従高而下不能従下
上 むなぎ 鱧し。和 無奈木黄奥鯊沢に在頷下者也。日六 ろまろ乃ほとのま
ら。 をれをやとにをーーふをろむろきをりめセ。日やをくもいけ
らあーむををくやはくむ乃き むー 出し。方言乃代をーくのーくあハ
ををるとかとにををうを こむをにはせにをりをもいれいをりをん

むくら　蕪し。方四いらをむしきにかいまをむくらふのけらしきやしに入きさし。人
む。月十一　かりしへひとりとりとハ八京むくらけひとる庭に沫しらまをし
。月十九　むくらをよいやしきやしも天皇のまさむしこうかむしらまをし和漢毛食
時珍曰二月生苗莖有細刺葉對節生一葉五尖微似芡麻而有細齒八九月開細紫花

成簇結子　むくひまつ　徒松し松枝ふおかをむ次ひて神まをむくるをしし方二
加黄森子　有同皇子自傷結松枝歌二首いとしろ浪まつりえ
をりむしひいまさきくあいまさかりしむ。皇子ハ者後天皇之庶子也兼名天皇元年
にあしるつしいとりて十九歳にして死の心後白坂にてわなき死したまへりうり
時松をむしひて神まを向けあををしたまへり月長皇子高市皇子薨松哀咽作
歌いましろりかせ中ふまてるむ次ひまつろろもしけ次いけしへ松のほかしい

むろのき　天木香樹又稚。方二ヤセ乃ろらのいろのかをむしこにおそし
紫ハ白ふらえぬらも。月十六むをとかりこかまくろむろのかをしかつめり
ろしをかきたろむをめ。和糧一名海杯無名雅控行松之名雅翼云天之將雨松先
知之しし又似柏香ろらのろろろるて天木香樹ろかきてむろといへるるや

むらさき　まし。方十一むらさき八所さしのろつていちろ八十ろちまをにあへる
まやしれ。和紫草無良散佐。式　紫草卅斤酢二升灰二石

いしろをに松乃灰さしをしししに次ろちろへし。後拾遺紫ふまやふ海ろ多乃ろ
ないけにをひさしをものにろ有ける。源十采不灰あひりきけをとりまふふふ里ひ
ろめ
けむ　むのはき　行縢し。釈名云行縢天竺俗行縢之言裹脚可以跳踉往反
也。詩疏茱萸　赤茎在股下也。方十六市在股邪幅在下。注邪幅偏也邪緯千足
加今行縢和訓東脛在股下也。方十六そをしきちせ茱

むーろ　席之方　むほこ
にをてこうつろりにむうえきかけてやしめころきみ
乃ろちはきつれいなむーろーきてを君をろむくしもかも。月七
ろーせ乃ち松ろるのこけむーろーれろ松りけひをてぬきちーる　むーふ次
はる　蜂食之。古上むーふれまにこやうろたくふ次まさやくろをに海苔乃ろ
はりるむ。方四むーふ次まなこやろをにいゆくれし妹くーゆくへをし
さーも。山背乃宇治乃松ーきぬ
乃ふ次まをむーふ次まといへるめへし

○米

め　後をりよてにをし。方三こひさしめ。月七いつちゆるめ　め。方四行月れちれ。月十行塩の
。月十三あひかくらあをのさかいとれほーー　あくる。月十二衣乃ぬひめ

ゑゑ 感じ。日神代紀 情愛 方土 ゑゑや 感ずい。日十九 ゑゑしたまたな
。日五 めこ これハ ゑゑ ゑゑ ゑゑ。日九 けゑ のこハ めゑ ゑも 見る 事こし
もとゝむな。日十七 ゑゑ ゑゑ ゑゑ。日十八 ゑゑ ゑゑ ゑゑ。日十八 ゑゑ ゑゑ ゑゑ。日十八

なるべし。和名抄に師説女乳牝止言書妹也唐式云皇子乳母皇孫乳母
采乃正弁色立成云孀女知牝毛今按即乳母也。合成長恩如母故曰乳母云

め乃か

女神也。万九男乃神也ゆゑ―たま　ひ女の神をちえひこまひてし　めろ。日神代いしかかふちかとふちなあし
そろかく―めろうまちろ

いろいの神なり　め　海藻也。万三寄乃あまは軍布苅―ほやきいとまなくしくしけ
て寄めへし　のをそ―ともちくに。日七海藻。和海藻時黄鰯之毒妻
布木采俗用和布。日兎藻
ひろらも。文選云海若海藻

○毛

え　助語也。万七川音ろ―も。日六こらくし―も。日十七こりこりむも　と。もあ
。日かめ―も。日十四かゆつと。日けら―も。ふしかい―れほ―　しき
てをりふ―ゆゑ。万十五をちくゆうむしゆきのあまのいちろ。日たひよてをな
くえやとわきもまろて。日五ともちろくをちくもあ―むをし。伊女のさうろく
かつけんとんある―のをとをあをえて岩のそ―なゆひろけきに
出てゆく―まろあるとぬきうれかれをへもちなくちりぬへきうれ　とか　欲得之とろ
百六十六　枕也。日

。古下れにこ―ゆつ乃天乃わさけよハいよりたく―ゆけよハいよりく―これわきつき
う下乃いたるもかわせを。万五こちわちんれりろき今もたくちたのるひろまもかと
祢のひくらしつ。日十七柿ハ―こ花まもかほ―き吹出むときをけハきりぬ日ちんむ
。日十四あ乃れとやんれゆりむこまもかろつ―れまへつきく―やまんかよそむ。かも
とりふも日　ところ　如已之。万十四ところを乃て―く―いたいやあさまに。日九
まかれほ―　をところ中にまけていあらしとくにもろ。日廿松乃本ハを
えたるうれいいえひ―のれをえれ―くるとこ―ゆ―ところ。日九をころをにまけて
ハあらし―く―。日十四たきにをもを殺乃ところやとうりいきつく妹をれきてうぬ
かも。日山菅乃根ところ　日神　持く。万廿くまくらたいのまるひ乃ひ
若嫖火―。如くうちゆめへ―　と―　とてハつるとつけろうれのねるり　枕　特
。ちを――ゆいへるハ赤ちるへ―　默れ之。万四ところえわ―ぬハ―。日十七ところ
。万天地をちゆつ―ともいり　と　とあらま―を―。日十七をとりあ―む
―　寒死を古馬ハちほ―ゆ寒り。源花宮　かとらん（きえ戸に共さ―てけ
ハうちちけきちほあらし　に孔徴為乃個しあをとりかれハ。今俗
りし　と―る　持在ちあの約をこ。万十九つをころきしけてをとるほ―か
といろ　えあ―ろも似るりあをきぬるさ。日七ちろこ乃めえまもし

たるひゆ。に。に。日七まんら
をのゐまきゝゝるゝもけ傍つを

ほゝり 徘徊し。日祇園紀いゝひゝゝ
やなつきの乃梅かちにいをつにはひゝゝほろゝ。日神武紀
ほきもほゝ。方二ゝつらなんいをひ

とと 本し。日孝徳紀ゝゝに花はさ
ゝほりゝ。日三ちひたかほりゝ
けともなゝゝがもゝつゝいもう
まゝさきてこぬ。方五うゑ竹乃をとさへとよしていをむいつゝひきてゝいをう
なけかむ。日十七さてゝつゝ乃本ゝゝゝ校もれやゝきえに。日八ゝとにちらつ
。日十とくゝ

とゝな 本無しれほつゝきを以今俗ゝゝをとゝいへるハ
乃ゝとちゝ
ゝゝろのゝゝみきゝてゝ乃を乃逆ちゝへゝ。方二なゝ
かもゝゝ安いひけむ。日四れ
ゝへ
ゝへ
ゝへ

ろくえて
もをれこ　そろむき　諸向へ。方十四むさ〜の〜茶ハそろむきかるうくる天
うまにまにわれいくりに〜を。茶の間よりちひきてかふ
たこうさへむ　そろ〜　偖し。方十三ろ〜ハさけくとまをしかつ〜きてに
かふそろ〜　。後花安多智說者し。仏足石歌人の九ハえかくあれい
つりのあのすれ〜　そ〜つひと　本人し。方十三ろ人ほ〜き次をやたつら
ちれづもあもろ〜　し〜今やなくくるるつてをれハ。を年物
〜ほ〜さんをりふをを人〜いへるぬいそろ人ろ〜いへるて〜。後拾遺人ハられ
ちを〜ふほ〜きにたるひのほうまなくいうかるむ。源氏ハ米ハ稲よりもあまと
けりよりいつらけえて人〜て〜ろるてえんつけ　その〜へ　物部し。餞逐日今之斎
さまへり〜し。花ちりかふまろひ〜ひ〜ちな〜　し。方三物部乃れしのうと
けをハ大てのうさ〜の　そ〜ちるように　股長し足を伸ていめるそ〜人。方十五
まにきくといふよのろ　そ〜ちにいちさむそ〜〜　そり
えて。方四むそ〜たまハさつけてかつ〜も花とりきハいさふ〜りぬむ。日三山そハけと
〜ちりて〜も寺姉ふりしらむ三めをを人〜めやも。日　八ろの名を大くめえとれ
むそち　そり〜へ　字紀〜し。方十八やきこちをとをしのやきにあれくりくりへやり
てこ〜　そ〜人をそ〜めむ。日十七とちとりへをきをて〜し。日六

大そのさうひ〜きふと山とりを変とるとり山そりられやま〜
。日八ろ門を拾ふ田をそれハ〜。日十三ひそ乃寺山そ〜。日鴨寺地寺　そち　望そ。方三
ふ〜乃家ふかわく高ハ三七月乃そちにけめれいろの夜ふりけを。方二そち
つきのたも〜けむそ。日をちつきのいや名ちつ〜〜〜。日月東西ろ名稲乃
茶　そ〜へや　百年出そ蒙年もかきちる山をそ〜　そゆるひ　焼火そ。方二
ク　。方五そ〜へやまこえてをゆきこ　をやる火も
〜りてて三てふくろまハ入るといそれやもちくいそなくよ
。日十七ろまハ火さへそえて有りひこひこ。日ふ〜ろ祇の先　そり　祇社そ
〜ろをそりそらへるハろのきつまりきれとところまハ樹乃ちけくて年徑へめるを
乃ちれハ本の当けをとに特やし〜なる〜〜。方二なきさそ乃そりにろを
あいのれ〜もいろ大そいたうむそ〜し〜ぬ　そろそ〜　唐土そ。方二そちそ〜
。日七きそりそむうちて乃祇社そ　乃そほきさそひふろ
大さ　そろさや　二室そ。古下たきへるハをろつち〜くそちやのきそつこち
きこ　きそふへそそられ。方四人そをけくや君を二鞘乃ハへをへ
をて〜ま　百合をの至湯し。方十きそれハそれそ
つをを〜む　それ乃そはぐき　百合をの至湯し。方十きそれハそれそ
くきそ乃そそてつれハ〜やちむ君ろあそり

公。和鵜一名鸕鷀伊弉冉尊母受一名鵜。葦垣の隈に生ふる草を返て
葦乃河を渡るなり。歌略云葦垣ハ葦をもて造る
築陵是日有流忽部功中老之入役者之中而仆死時異甚多死此相其疾
即石衣多自身出之死去因視其中老咲割剥故号甚多曰石衣多身
系 **えちこり** 繡毛衣。方五世の中ハかゝるこゝろかゝらハ
ゝ　ちよゝいもの。日三からつ松ちりかけゝ。和鵜毛衣 **ゑ** 熱
なせゝ。細葉を青大麻 **えふーつうぶな** 蘆伏拯鉢之手一つほゝあるも
ゝ皮をたゝきてちんす　にふてをふをといへり。方
おきへゆきへゆきやゝ鳴くめ
つちをたゝれるかあつるる **えちどり** 百千鳥しれぬくのるんらん又
ゝちゝりゝ。方十六日かゝの
板のつえとりてむゝちゝりちゝりハ君ハ来まさぬ。日六ゝとり
乃こゑ一をつりきゝゝ。日十七鶏のうるいほつゝりゝて歩のうゝちゝりふゝる
て **えゝちゝ** 昔ゝ。ゝゝて　ゝゝゝゝ。方七枕山ゝとゝち
ゝ　ありれゝゝうゝ山ゝ　ゝ山て入ゝ妹ハ恋しきまさぬ。日十八ゝゝ石さ
へ衣ゆきふれいうつゝへゝもゝみつ山ゝも。日廿日の山をゝゝ。方九ハゝ。日百
舟のゝゝるつゝゆのあゝちふゝゝゝれの原ゝゝゝとひるけや。日ハ枕のゝ乃ゝゝ

つるゝきにゝゝ。日八ゝゝれの雨まちゝゝふゝりゝゝれあゝゝにほへる山乃ちらまくを
しゝとゝ。日九ゝゝゝゝゝ笑ぬをゝゝあらゝ花ゝゝにゝきに。ゝをゝふゝりゝゝれ
えゝちゝちゝきゆく ゝゝちゝゝゝ。方十八ゝゝれの原ゝゝ
ゝ。日九ゝゝちゝゝゝゝゝ

きてこそうゝしあれいちひきゝあゝ。日三 於千万ゝつ乃あまゝ久乃ゝを乃ち
むゝかるらむいさ行てしむ。日二川もゝくゝもゝひゝこゝ。日十 おきらもを花
ゝを
ゝみ。日慶林紀国極人巻 本朝食艶抄 本朝食艶抄 本朝食艶抄 上条名曰毛添 上条名曰毛添
ゝて 生鮭投熟湯剥皮。和名醋小食之祈眼擦膀ゝ。宋史有熙寧勅 上条ゝ
膀。元史古偏云石陣人姓拓拔氏 上条ゝ
。西例花受志百球人姓拓拔 上条名曰詐禊子
かゝの桜の実ゝりをむゝをちゝり
ちゝりハくれゝゝ君ハ来まゝゝぬ
をゝつゝゝうけかきゝりてゝ。
。日一むさの出てゝ立ゝ
をゝるあまをゝめらゝをめをゝ
りせをやゝゝゝれゝりゝのをの出てゝ
。紙果髪ゝゝ。万二ゝゝゝゝひゝ
いゝきなきゝゆりゝゆひゝゝゝきゝ
ゝひゝゝゝゝゝゝゝゝ。日景行紀
。式内水刺於毛比。倭姫世紀内水刺於毛比。和主水モヒ比崖。

ゝ
ゝ。日雄略紀 崇神紀。万一立 於衣之匂へつゝもめれぬゝ
君ゝゝゝゝつゝゝゝりてゝ。日廿三の
崇神紀。万十立 おきたきにゝゝへゝゝ
ゝ。日かゝりもゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ。日十三まゝ。万十六 ゝ和琴
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

やあとにてゝをゝとてきくてにをゝ。万九あゝりほゝゑ人もあれやもめれきぬを乳
にやらふとひろちゝに。人もあれやものもいひあれやふきとろへてきくなり
下のあゝるゝ。万十ゝこゝりにいきつゝあまりゝ川の風ふゝちも人ゝいとあやと
。月八いまゝとゝろを学にわゝへらハまちさく花ゝつちにたちゝ。月三まちゝをと
わゝへゝらわやゝらくきのこつ
きかうへはちゝとのこゝむ

や 疑 あゝ。万八かゝ仏祖あひ川ゝかけゝえて今や咲らん
山桜の花。月ほゝくきんあきゝゝあ地ゝ枝ゝふゝきさ
きあゝわやこを
ゝゝりき

や 助辞。万二ゝ松もやあんこえゝゝりこゝ人のえゝてゝまをゝふやゝこみ
ゝゝりき。雑波のやをゝのやゝふんのやゝゝこゝひゝ。かゝへゝ

やさゝ 弥尺ゝ。万品たきゝゝゝもをかものをゝこゝろやさゝゝりいきつく緒をたきてゝぬゝも
。月十三やさゝゝゝあゝけきゝゝ。長大息ゝてゝけゝをゝゝゝゝゝゝゝいきなゝき
ゝのゆゝをゝ
ゝへてゝゝり

やきもゝらぬかも。万七ゝをゝゝゝ吉乃天地をやゝ人ゝやゝ
ゝらぬゝもゝゝゝゝゝゝやゝ。月十三君ゝゝゆゝ
たゝゝゝをゝゝゝゝぬやき
ゆゝゝかさむ天ゝゝもかも

やさゝ 和ゝ。万五むゝまのけ川ゝゝゝ家ゝあ
ゝゝ君をやさゝゝゝわゝゝさゝあ
ゝ。月ゝのゝゝふゝゝゝやさゝゝゝ
ゝゝゝ。源ゝまゝ紅人ゝゝゝて塚あゝたまん
むも人きゝやさゝかゝるゝゝゝ。竹ゝゝあ波きのゝけゝゝゝかゝのゝゝさゝをむこ

とにつゝむ人爲やさゝゝゝゝゝゝ。古今 伊勢 て夜乃ゝと

つゝに忘めゝむ年乃わゝゝゝゝむゝゝゝゝやさゝゝき

やすい 安寝く。万十いつ

くゝりきゝゝゝりゝゝゝゝゝゝゝゝゝてやすいゝゝなさぬ。月十九あやあく

さゝぬくまゝてにゝゝとゝあやゝ次いゝゝゝゝゝて君をゝやゝゝ。月十三ゝゝいゝゝゝて

やすむ 鳥ゝ。日神代 ニセトモワレニサニヨヤスムコヲナミニシ 難然吾當寝息請勿視之ゝゝ。万十六ゝゝゝゝゝゝ

ゝゝ菜ゝゝきちこうつゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

日上。万五 ちからくもよりけくふちゝくるやう
やくしかさちつく ほかゝ。日七 鄭ヤ
にあるさらめやも。日十 ちからかゝ
むりつゝちきゝかりけふくれにも
ちろけむる阿伎やらハ。日十 ちろ
ちらおく。日十二 たゝらある仗を
日廿 ちろちりく 安もつろひと人ハ
いへつとやらむちろつきちれし
くゝ申 たゝまね

やのら 親族ゝ。万三 阿さくるやうゝ
きてゝ。日九 やうらゝしいりあつまりゝ。後後紀法ろ
族をゝ。脊ヲ 脊ヲ 親屬日 骨屬日

やせ 痩ゝ。万二 大舟のをつるとまりのをゆとひるあゆひやせ
ぬ人ろゆ五に。日四 ちろ人ハ死ぬる女殿川下
ちわれやれ月ろ口にける。日十
いトにてひ口にけるやせぬゝ

やつこ 奴ゝ。万七 仗のえの小田かられこいやらもな
きやつこれと妹うるめるちぬひをを
かる。日十八 ちゝされもかるもようきも
ま次らをろさゝきんもとハちゝ
ちろやちゝろれゝちぬへゝ。日十六 香めれると

ふにるゝりろ川ちゝろゝふち
ち先さいゝきゑやちゝ。日十 ちゑ

やゝけゝ 素肌ゝ。万二 やゝけゝちらをつきゝちゑ
ゝ ゝ 三先た 守護ろ神手入れ奉る後に 夜和殺ゝ ゝ 土れ入ろ。儲る
楽要川のきゝろや
ゝ口やゝらかにゝ

やまとめ 大和女ゝ。万十四 うち日さにゝやろつゝセハやまとめ
ろひさまくゝゝにあをろ伝ちちを

やはびと 仙人ゝ又山人ゝ。万九 詠仙人死ゝこゝへる人をゆけやかをころも羽衣
ちゝ次山ろ伝人。日廿 あゝ引ろ山行ゝかも山人ろわれゝえゝ
ちゝやまゝろゝれ。日あゝ引ろ山ゝ
山人ろゝろもちゝ次やすひとやちゝ
山さえ人ろひゝさゝにまなゝりふゝ
やすほゝちゝと次ゝもちゝろろきちゝ
くゝ人ろ
さえちゝ

やはろのろら 安之伊系ゝ。日神代 千時 八十万神今会れ天あけ造い
ゝ。万十 天ろ系あろ伊系ゝさゝまりて神のつゝハハ付
ゝ

やちほこのかみ 八千矛之神ゝ大汝ゝ七ちゝ之一セ。古上 やちほこの神
きゝなゝ
くに
ろゝゝゝハやゝまくにつまきゝろゝてゝほゝゝ

[illegible]。方六八
ちぼこの外のみすてゝ

やまつく　祝。日神代山神名号山祇。方一山つ[illegible]

やまゆき　山雪。方十うぬちつゝ山雪のいちろ　やまにんち　間。人成

くこひいもら名ら〳〵ゝ[illegible]むのも

。方ゝ[illegible]ゝるゆをやしにて天ゝ[illegible]てかくあゝゝ衣めゝ[illegible]つゆに人ちに。日一このこと

をきくゝにやちらんさいけ焼てれる月秋もやしにのこも。日五やしにや焼うゝてあか

やまゆくに　八隅圀。古上八ゝまくにつゝまきゝゝてゝほゝゝゝろくゝく

まちゝゝ。大八洲。方八ちゝゝをあゝゝきうゝてゝ。方六やゝまのゆまむゝゝもさえゝあ

ちゝをゆゝをゝ[illegible]　やゝろ　社。方十ろゝのゝちゝいゝゝやゝろのゝゝちゝもも

ゝやゝふゝかゝゝのやゝろのゝちゝゝ[illegible]　ちゝゝゝえてちゝといゝ[illegible]。方ゝち

ひゝゝもゝ[illegible]をかけぬゝゝ[illegible]

ゝくゝ　やまゆゝまき　山巻。方十山ゝほき巻ゝ有

ハきをゝゝかめつゝゝゝこゝ[illegible]

あゝゝ　やまちゝく　山近。方十ちつきゝゝ[illegible]山ちゝく家ゝゝてつきてゝくゝゝん

巻ゝ[illegible]。方ゝゝゝやゝちゝく家ゝゝゝそれゝゝゝゝひゝの

ちゝくゝゝゝこゝゝゝは　やまゝ　山巻。方十あゝひきの山ゆつゝゝゝゝゝひてゝ

[illegible]ゝゝ　やまゝ　ゝゝゝゝゝ

山うるはしきて
いねうつぬらも　やはるとにうえ　山谷狭く言きあ〜川の山谷こえてみつうさに
いうやちくらむ〜〜ひまりこも

やまゆき　山行く。方十三山ゆき地
ゆきひろ〜ひ川〜〜　やまのね　山之牙〜。方共あさき山彩さく
人也る山のかりあさくいくを

いつたくえ　やはてつ沢　山聘し。方八くまたけうのそうの山
ちらに　てらに秋のそうちらまちらまくをも

やろひてのうら〜〜しきたうそ〜。日八山　やまひこ　山彦〜。方
ひこ〜ふあ〜。日十山彦のうふるまてに　やはのうきつく　山之やう〜。方二豆ひきのやま
めわぬ山　のうきつくま蛙まつ〜わわ〜ち

ろうつに　やはれろ〜しのかゼ　山風〜。方九山れろ〜の風ふふきろと〜い　やま
。日八やま〜たうせにちりうれなゆめ

もこかほ〜　山と人欲〜。方六やまうれい山もうほ〜
里うれはさとも〜ろ〜こよ〜〜　やまのうき　山之退〜
山のきく

まりをふち〜ろ。方六山の　やはもせ　山も狭〜。方八山もせに　やま　山斎〜
うき地のうきうきく　さけるあ〜ひの〜〜　。方三いも

〜てうろりつ〜〜ひうやまはうろうくうけくちりにけるかし　や　屋〜。方四〜れろ
屋ちにつうり　齋を〜。敬舎　慈孝之室日齋〜〜

ふうにふやう〜〜ふうせをやりていうふはうろう。日十九〜も
えしやあうもうう〜〜きまううらうひゆ〜男をいふうをひて　やけ　屋〜。日計起統こ
しをきこうをうう大やけをき吉日のかれうをを〜い　をまうらうう
。方九こうひう〜のこやけのうにさ〜むうふ〜〜

やうこ　屋形〜。方共うめやろ
た黄染りやうこ沖の

門てくう。今俗〜
舟やうこうり　やとり　旅舎〜。方五いこうのあき〜まぬるやとりれ
る男。日〜くまうらこひやとりやれいうへれほし

て。日十五大きこのこことかこしたみの　やどあけまけて　屋戸開設而〜。方
ゆきろうに〜〜やとりいすかも　四ふきれろやと

あけまけてやまきこむ爰よれ人よこもと　やとかさ沢　屋戸不借〜。方二
〜人を。遊仙　今青室閉戸爰来向渠他　こやひをとれれ

きけるをやとかされれをかへりをろのこやひを。日七足　やぬ　屋根〜やむ
川の山ゆきうらしやとかうふ妹こちまちてやう〜かさむうも　ぬの男根ろ

。方四　ねふきの足あのやぬ〜山ちうしぬのこりてとてまぬ　やうこを　家
。日十ろうき板ちてふける板まのあいさうい〜るやむ〜ろわうぬうけ　のね

ろうふし。方十七やうをうあう大足ろ白めりの沢ろりつけて〜。日十九夫耶屋のうろ
ををををををこ〜まれにかこぬ日まぬくはろへはける。日やうをのまこ〜ろう

ちゝをやゝにもゑかきすてんてかゝゝゝゝゝ。六帳やゝをのまゝろ
乃奇を川きをて思ふゝゆきにあハせつるかも。神牛柳やゝをゝ人麿乃株の
やゝゑさうふに　八まゝ馬八足を以。日　枝葉に　やまのめ乃こゝまし
きゝるをゝゝ

やつけ

ゆゑにひゝゝ枝らゝの馬のやつけハそゝけゝゝなし

やはゞり

山雞ゝ。万八あゝひきの山とりのこゝろハ家ゆふつゝいれらゝへゝ。
日十あゝひきの山とりのこゝろの家ゆをゝ乃ゝゝ恋をひとりかも
ねむ。地理志云山雞死め家雞雄況雌亟者也。和山雞一名鷄鶏
夜乃止利。好物志云山雞め羽毛自愛其色終日映乃目眩則溺死

やゝき

傷　槍ゝ

。古下やゝきゝ乃ゝ
たきかゝゝゝ

やぬぎ

柳しゝ矢之内の第ゝゝ式兵庫寮造箭所解然
所採軒取弦好ゝ。万七やぬきゝろきれハゝえきれ

やなぎのまゆ

柳眉ゝ。万十ゝろやゝの物の眉しゝゝ後者かも
。日十九ゝゝ物のほゝき眉根をゝ今ゝまゝゝ

やはぢさ

山萬苣ゝ。万七山ちゝの花ゝゝ思
ゝゝゝろひめゝん。ちの奈ゝゝ出

やはゝちだぬ

山橘ゝ。ゝりふやふかゝゝしゝゝ
ゝ。日サけのゝゝの奈ゝあへてゝあ
。万八山ゝちゝゝの色ゝゝ

やゝかぬ

山萱ゝ萱ゝ植ゝゝゝき植ゝ
しゝひきのゝゝもちゝををゝゝ
ゝゝ大音寺の山ゝ夜乃清ゝ物

乃旅人も山あゝまゝりゝ。万九やゝ乃ぬゝてきれゝきぬゝて。六帳

やはふき

。和　繫

山ゝゝ沢ゝ生ゝゝゝる山萱ゝてゝたれる夜のあつらゝゝきゝ
をやはふきゝしゝゝる八地ゝ款冬八ゝのつゝてゝやまふきゝゝあゝ。万八かゝ仰神奈川ゝ新
ゝゝて今ゝさくゝゝむやまふきの花。日十花さきて実八ならぬゝてゝゝゝきけゝたゝは
ゝるかもやまふきの花。日かゝゝあゝハなゝて極けん山ふきゝれゝたゝゝゝ。日十九ゝゝけ山乃谷
。日蛙ゝ仰ゝく水ゝゝ乃ゝゝゝ乃ゝゝゝ。日十九ゝゝけ山乃谷
へゝゝ行ゝゝ

やはたけ

ゝゝ門をゝゝゝ又ゝゝ山ゝゝゝゝゝゝゝ。和麥
山ふきをゝ　門冬　夜未侯サ。或説初夏の刈ゝゝゝ。万十三ゝゝゝ地の
きゝゝゝ乃ゝゝゝゝゝゝゝ

いるハ
非し

やくさほ 燒矢し。万十五 さのあまの一日七れちれやくさほのかき矢さとり
さいまる加も。伊あ一乃やのなくりしはやきいくまなくつけりを
くもさくに
きにけり

や 矢く。万二引もちるつやり矢くくさ。日七 あさこのやハ格乃小竹乃や
にもうてまことあくうえむやてひしきよりを。日三 まちらをのろ五
あれれこいつる矢を後ゝむ
ひくいかくりつくかり 絲

やきさち 燒太刀。万六 やきくちのかくうらんな
えけり。日サ あさようひよ祢のくくあけハやきくちのところもれいれりひよつも。日九
やきさちのたかひれ祢りくいもる。日四 やきさちのへつるふくハけくやつきくく武從
日 燒通の魚福以上 与拂事乃如くく

やきむーろ 安房く。日仁 後紀 はくくてのさうき山とつきめくくあさ
やこ白くやれむ ろかも

やな 梁く。和梁 夜奈 奥梁く 唐敖 籍 夜奈 須 取漢
。布とるみる如くあきをく 佰也。日神武紀 條水西紀 亦有 梁取 奥者 。万
三 このくれくつくのさえくのちくれこハやちくハくくられもあらん。日

やまとつ

いれくへにかなうつひくのちくつやいまるあくまくくつくうえくもも
。古下 君うゆきけなくちりぬ山くつのむくへをゆくむまつよいまくく。万二 ふ日上 自紀
云 山多豆者是今遠本者也くく。日六 やまくつのむくへまねてむくく。和 鐺 多豆本

やまこも 菰薦く。万十三 されたうむ小屋の立きやのかきてむやまこもを立きと
てくく。日ろハやきぬれハ冷くもちく
日 独めくくちめやもあやむろく

○以 既出 ○由

ゆ 良或ハ自くかけるにようてゆハくりくく粉きれくゆ之足ゆくりのゆあれ
くくくく紀在のすをされてくくくく。日神武紀 ちてちあていちさの山のくのまのも
いゆきまちらひちくくハれハやちぬちまくくりくかひくくいまれけくく。万三 たくろく
らゆうちいてくくれいくくしろくうふくのくれよ雪ハ夜くける。日五 をくちえのちくうゆへゆ
くく舟のにほいよ久くく

ゆ 系く出 を去去をくるをゆくくを又ゆくくくも。日神代 齋
いくくまにけり。れ久くく

ゆ 庭之梅柱く。万二 けまくくもゆくくけまくもくく。日四 ゆ
ゆくくくくく。日雄略紀ゆ
くきかもうくくらくくゆ

ゆくゆと 將往く。万七 ちくちくハつくゆめくさき行の
くくひよねくく今くくくも。日四 くくく
へよ夜久ゆけや裏 義 なくれ山之往人。日十

ゆき 往く。日天智紀 ちくまのいゆきく
くくくれめくくひゆぬれくをくい
ちかるまくくくくなのつくくと

みてゝしらけむ。万二天ゝ雲ゆきけるつく
ゆくさくさも。日サゆくさくさ。日九行ゆ
さくもりねいきふり
にてゝやつてまし

ゆくらゝ

後ゝ。今候ゆくゆくりゝ海ゆ日一
。万三大舟のゆくらくにいまる。日三はんの
かちねとゆくちらにゝ。日二ゆハ

ゆし

寒ゝ。万三ふりゝりもちにあゝてやわらこゝ
ゝ
いたらはてゆくくとゝ

むた舟のゆとにるらむ人のゝゆるに旅ゆふ。万三ゆ
たゝえてゝ。日ゆふりゝりゝ海ゆ
えうりてひむゆゝとゆまゆゝりの波ゆゝ
ゆにわりゝらゝうゝりゝ花りとゝて

ゆくにたゆゝに

ゆきとゝへるゆし
ゆえやも。日サゆきゆゝもゆけきかもゝ
つゝゝりゆゝにゆゝにうきぬゆゝんゝゝも沖ゆもゆりかてゆゝを
。万今ゝてゝれを人ゆとかゆゝ大舟のゆしけたゆゝにおゝゆゝころ

ゆちり

雪新
ゝ。万七
大海のゝゝゝゝゆゝりゝ波のゝゝゝゝゝとゝりへゝ海のゆゝゆけゝ。日四ゝゝゝゝゝゝにゝよ
る波ゝゝゝゝゝる日ゝ。源ゆゝゝゝゝゝゆちのゝゝかゝゝの伝ゆちゝゝゝゆたゝゝゝれ
ゝゝゝゝゝゝ

人のわめひのこゝろ〳〵れちよきとゑんとよむ里人もゆめ。万四あらさまのとゝ〳〵のへやわい
いましたとゆめよのちをこのちゑのちにゆる。日(ゆきさこをそやゝたまゆやゝちるつゝまつ樓ふり
きるたゆめ。日三浪とつたゆめ。日八ゆけ花を

ゆら むゆる。日顯宗紀をつゝふめてゆ

尽にちゝにゆる。日土ちゆちゝはゆるつとめるゑむ くゝよたきあるゝゝも。日神代紀八段

而手むも玲瓏(ユウ)よちゝれるをとめはゝれゝゝむはちるゝゝ。古上其御頸珠之玉緒母由良
迩元中良四志所ゝ。万十四むもるもてもゆゝれるもをきゝゝゝけゝるぬひあへむかも
日土むゝ(ユラ)。日十三よにてけるむもゆゝにゝ。日小紀もゆゝに。日廿ちゝ花乃初子のりよのむさて
きよにとゑゆゝにゆゝくむ乃を。玲瓏をゆゝちとよゝるゝむ乃ゑ乃てりかやゝをて花ゝこ
めていへる

ちゝへ ゆゝもあはむ。万十八さやゆ花ゆゝもありむと

へめゆも。日ちゝ〳〵のひゝりゝゝゝゆるさやゆ花ゆゝも
ありゝ〳〵男ひゝちてき。日さゆ花ゆゝもありもとゝ
わゝ〳〵ゝゝ今めきゝかもゝるゝゝゝみまゝ

ゆる せ 俊ゝ。日書紀紀れゝこのゝめやへ
やかゝのきゆるやとやみて

。万四まゝゝかゝんときゝんをゆゝてゝ。日まゝゝかんときゝんをゆゝてゝ。日ハゝゝさ
にもゆゝしたまゝりゝ。日土人乃ゆゝさむゝ。日十三あつさゝゝひきてゆゝるさぬゝ〳〵

ゆゝる 後ゝ。とゆゝるせとゆゝてゝかゆゝるせゆゝれゆゝゆゝたらきゝゝちゝるへ

。万十三 芸れひゆゝる。日十七ゝゝゝゝゝゝふく。日土梓ゝゝてゆゝる

さぬゝ。日ゆゝにてゝゝゝゝ。古下大天乃ゝゝゝゆゝれゝゝのやへのゝゝゝのきい
ゝゝゝはあり。元と百と百ゆゝゝゝゝれ。文選古結之相吉日ゝを衣帯日已後ゝ〳〵

ゆゝゝなく。日景行紀(ユクリナク)不之之間。日雄略紀日不之。源さまゝ八月にゆゝゝなく
くあゝゝゝむゝゝゝ。土佐日記ゆゝゝゝなく風ゝてゝ。蜻蛉日記

ゆづりぬ 行幸ゝ。万四れ乃ゝゝ月ゝゆゝりぬゝゝゝゝゝゝる義
詠を長りてゝ きゝゝゝあゝゝぬ夜れ浜く。字治餓鬼消息也也重ゝ

ゆゝゝを ゝゝ雄ゝ。万九ゝゝゝゝゝゝ

いかけつるやとの
間ゑとゝむ　ゆつづ　長庚星こ。和太白星一名長庚星養見れ西方の長
庚此間由不見〻。詩東有啓明西有長庚〻。方十六
つもかゝよおまちをいつまでゝ仰てまこむ月人をとこ。月二ゆつてのかゆきかゆ
きゝをぶ。月五ゆつてのゆへゑもれいさぬとゝ。六帖ひくるれ山のを望ゆつて
のほ〻〻りゝれ〻ありぬ男ゑ。よひこにたるゆなむ　ゆこゝを　陸月〻。方三
夕つての月ちきゝろらあひうりしれをゝむ　あまのをら
ゝりさけうれいをまもりてかけをりゆ乃ゝえけむ　ゆ　湯〻。方二生〻〻〻〻ゝ
月丸ゝまゆゝこいきてかをゝつきひ〻をとゝ　大男乃ゝきまを国のこと
こゝ湯ゝしもさいよあれゝもゝゝをぶ。月十四あ〻かりのゝゝのかゝちゝゝつゝのゝ
をゝらにころいゝあくに。月三伊ゝ温泉。月六宿湯温泉。月自紀温湯ゝ。月伊
陽宮。月三有
尚温泉　ゆくづうかへらぬ　逝水不還ゝ。方十五ゆくゝちつかへらぬてゝく
ゑ〻せつゝえぬこゝゝ。月十九れ凡のゝえ
ぬゝこゝく約ゑつゝまぬてゝく。月十五約ゑつゝかへゝゝおゝひろめゝれハ。
古今ゝきゝゝぬゝゑのやちゝひかるゝきハちゝゝえつかつゝぬちり。論語孔子在
川上云逝者如斯
夫不舍晝夜　ゆどこ　寄床〻ゆゝゝ道。方廿つゝちぬ　ゆゝ　祢　齋稚之稚をれ
つきゆりの気つゝにもゝゝ　いゝ　ろひときゆゝき

よまりてまくをゆ。太祝文儀式代云陽稚下嬢ゝ。方十五ちやきゑ杙きりにつゆゝ
ぬまきゆゝき男ゝこひわゝかも。月七ゆゝぬまきあゝ赤の赤をゝゝむゝとゝ
ゆ　うげぐち　幕張更にて月ゝ生ゝうゝきゝをゝゝちゝへ　方四ゝ
やゝの赤ゆけゝ赤ゝ方ゝ赤ゝ清ゝゝゝゝ赤ゝ赤ゝ赤

つるころ
かてく　ゆき　方六ゆきとり神つけ衣。日ゆきる衣い。式夾纈。日天智紀纈。和
纈かて神ゆ結帛為文採也強幅曰繒之有交採者也。今かのこゆと
いるるく　ゆ　ら。古上ユラフリ股振立而。方三ゆちらふりたて
ひちるへし　ゆ。日ニとちるゆ少し次ひさりきく
たれて敷たいて。日七敷かくる仕の雑ひろき大体い。日九ちまりゆき　ゆき　敷。方三敷え負
とりたひて。和歌人所世尊曰敷曲攻心為双其手也。日神代紀　敷い
ぞひき　ぞ　日作ゆ雑し。方三ゆちるきかひちたりけて。ぞちたきか　ゆぞ
神代なるるのみる時神のそくてちとりあれかるゆ
し　ゆ作ゆ雑ゆ作たこゆとれはくてつけちりきれゆをくくしても神へゆ白し
ちくくり。方三ゆちくくしてゆとりをちて。日六ゆちくくしゆ白の山。日三ゆちく
たし日
ちくい

○ 12 既出 ○ 地へ

ゆ　従くとりの男神ち。方五ちまちくゆちちちえむちちこんいやきわくくまち
をちぬへし。日面ちちくへの衣の神をまちちかゆあまてくくい白流とつちゆめ

よ　齢くちちひちちいかちくちらきてくちくし。方一天ちもつちちちれやいえくちの昌の姿
れをいさむをひてた。日二天の天ちちくちけくれいかちの天の氏寿ハとこしくあまくちらくく
ア。日面ちちちちちゆむちちをちゆをちゆもの　ひちにつくくまて天ちちちかも。土ちあちちちくし　よ　代ち。日神代れきちちり鴨つくくまに
。方三神代ちちり人ちちつきくく。日六涙きちくくしうちちくくくし神代ちちりゆ永ちちち天
ちちのちは。日大ちちちちちちちちくくしよちちえむちちあつまちちくくちちのくくゆよちちゆ花さく。日九
うつちみのつれちきくれいちのちちえん　よ　助ちくし。方一ちちちえちちちちふちくくちちよ
つけけてちちちちひちれはき。和名抄ふくくちちく。日面れて天ちれはは
いつくれちちちちのはちのいちちちちらくしちちよきちちひちりねて　よ　節ち。日供代紀ちちりくちち
。日いちちれちれちちんちちちわきもいけちくくく

ゆきとけくゝ。日二よけくゝそうぶきく。家お集ほくゝき次第へ

よきみち 道遊

ゆうはちかていまきぬゝしいとそうけよく。よきとくけ日

。万上をうさきのゆくゝたを人ちかようひろありてもあるとまきむよきこちるセ

む 疑乃お。日九宗人りつひちらゝ書ひとくれくわきをぬられるゝ。岩丹集小

世山ゝ出ゝるゝこうりるしゝされよきつきれや花のあくわハ

。春屋宗集よきねをゝうかくゝい。古今花のあくハよきて化

ゝ。万九坂ほちん人のとくとちけきもあるむ日まぬく月の祝めん。日土人乃云

ひとくれをきてくゝ。日八ゆくきにもかよもよこさもくゝ。日唐祚紀 遺言。布つぬ

かのかにとこ

ちごも 疫寿ゝ。万十七ほとくきれとこちるゝ あとさハ花ひとくも

さらゝゝ

かれんちるむ。日土集人の名ゆ人夜書市ロくわ名を

いたゝつゝとそのまむ。桂子みゑハる

ちざ 任ゝ。日 神代紀 任。日 命。古土

ちるぬにくゝいきとちきるやくく

依日 舊事紀 封。万二よさゝた

まへハくゝ。日三大君の

よさゝのまにゝ

ち 好ゝ。万十つやのうきくゝちとつけやらハこちるよ

似りちぬとよゝ。とのくゝのまゝれおゝ

因ゝ。万四ゝちあるゝ。日土をまきうにひるゝ人ハるちんゝを

とちてうまゝ一日えむ。日ゼゝ乃月ゝをゝ名さられ日ゆハれく

百仝

もちるゝもあゝ。源帚女あまりの

ゆゑゝてるゝへちうゝらんく

ちん ちとなりむ。日わきもおう入ゝ

くちきりうあらそうゝれゝの山と乃てゝあるむ。日鈴明紀 鑽 因。ゝりと

ころと

りみさゝ

ず 家ゝ。万西かゝゝうのまくのてゝちをまゝとかもつまゝとよれとよ

まのてゝちを。日ちるるちるまゝつのゝれちゝ。日よゝセつなゝへ

てゝれきゝも。日六れきへより舟人のほるゝひよゝセていさつゞ

やらむゝこのやゝりを。日一少ゝゝハいゝやゝきゝすゝゝしゝゝとゝの

ゆゑもゝゝも卿ゝまゝてゝゝゝやゝ。万三ゝうゝゝ

ゝもゝい。日かゝちゝゝとゝゝこゝゝちゝゝゝゝやゝゝかゝゝハちゝくゝゝゝゝゝゝ。日土ゝてゝゝゝ

あゝこゝちゝ

副ゝ。万八清宮にふゝ

ふゝれてゝさけゝゝうあの花ゝゝちゝやゝゝハゝゝゝゝてゝむゝも

まゝゝ

。日十つゝゝおつけてゝちゝへてゝもゝと。日十ゝちゝゝふゝる君ゝにくゝゝちく

に又ゝゝゝふゝゝ日一。日十三君ゝ副て山ゝ

ゝえきゝゝ。日君ゝ副てゝあゝゝまゝてゝゝかゝも

やゝ

ゝかゝゝむゝゝ一君ゝゝゝゝえゝぬゝゝゝろゝかゝも。日十四にゝゝゝゝと

あゝやゝかゝゝゝゝ。日ゝとゝゝゝゝゝよゝゝちゝのゝゝゝぬゝゝゝあゝゝゝゝゝゝゝもゝあゝゝゝゝゝゝゝ

○日ひゝ祢ろよいさよのからあを祢ろよいさよのちろまつ
○日十三ひゝ　よ沈ぬよろるゝ　ゝ　ゝ　

萬葉集。方六よろづき

よきひと 佳人。方一よき人のうつくしく又てよ
しなどいひしたよとそよきこと

よくこつ。月六からゝ衣きたゝの里れ物雪にむをつけむよき人

よちこち さかも。月六よきこゝろのくるくるあるぬを板戸ならう角のよろれを三方会けむ

。方五よちこちらとてたつさとうりて。月十六まらゝゝちるハこゝのひとこゝ。月五この川
にちさをあらふをちゝるあわれもちるをしゝるいてこたゝるぬ。月名乃よ
きてゝ

よしもねなくに 夜寝不為。方五きこを板りてゝよい
いへるう

夜目く。方十三れまをゝをさらゝ青山

よん 夜。方三山をゆきこう取こうりて出くう月
かはこゝをみひしゝ大よゝきこゝ

よ かひろゝりきゝ月サあるねさんあるハ
ゆさひてぬをむのゝれ月九さうふうゝ歌ハふけぬらゝ乃
かねのゝゝ。月一さ夜深てゝうゝのかゝにれはゝゝしゝ舟人をてゝけむゝも

よぎうり 夜寒。方八ぬゝむのよきりのたてふ情ハゝ。月十男むのよきりゝ
てゝほゝゝも独ゝてゝへいもやゝつけて世。月九ぬてむのよきりハ立ぬ
ゝろをてのゝうやのゝへ

よこぎるくも 校園。方四ちゝ山をゝうきゝるをゝのいち
にゝふひくまてゝ

よなゝじて 夜毫つく毎夜ゝゝ。方十歌ちゝへて男をきまやゝよ天や
ある沐のやゝうをぬゝぬ月ハちゝ。月ちゝへてとゝ月し

よな 夜ゝゝちハ知かタちのふ月ゝ。方十ゝやゝにさゝゝ

よなき 夜哭。方九
うゝに月をゝゝるちゝゝゝゝむきゝをゝうまて
ほゝゝゝ沢よちきをゝつゝをゝをゝいなねせうぎゝゝあれ。月十三ゝちせゝゝ
ふゝゝうゝゝゝゝゝゝ思のゝうゝきをゝゝいれ世ゝらくに。松をまゝくゝけゝる
ゝのハ西なきゝゝ

よ 夜音。方四あつゝうゝ

よひ 初夜。方十男ゝよ
ゝのゝう思乃乳母
ひさゝゝゝゝつゝゝゝ男ゝのゝ秋つきゝけり月ハ少ゝさゝハをゝちの山ゝちゝゝゝ
乃ゝゝゝゝハちゝゝにいねゝけちゝゝと。月十九立わゝれまくゝゝゝきゝゝひゝのも

よつき 夜深月。方三ゝあゝねさゝに思ゝうゝゝゝぬむのゝちゝ月のかゝゝゝゝを
ゝゝも。月九あまのゝちゝをなきゝゝひゝ鳥乙のゝちゝゝる月ゝいゝま
くゝを

よつゝきけり 夜深まゝ。方六ひゝゝゝゝゝゝきけゝ

よゝぶ
ゝもゝゝゝゝゝゝ

らみ　黄泉。方言。ほつえにはさきのさくひとをふてのこ。日
さくらの黄泉よまもとむくる。日 神代 黄泉
夜道。方言。三つまたなりて　らみちのみち　四方之道。方言。わめの方言よ
かけうりよみちいえけひ　とりこちにハこ。日本
人名。日。おなのしれもの人のこ　よもで　夜ノ出。方言。わきも子を夜として
。日サきうえれ。日方言のれにハこ　乃ちうえてうりうろうを
ア つちハあめこと。名　よがらべ　夜鳥。方言。わときとうにちけしこのをう
ノ出といへるうこ　あめれりうへいいまこうつげ
ふこどり　酒子やこ。方言。やまにいきてうこうこりき伝の中山
なくきうつ名ちる。日ア方言。ちるこ　ちにきくくくくちこうこり音ふつ
きけるハなりめ。日ちうこうこうこ　こうこうみうふこ方伝保の山やこを
ほうくうこう。後撰つ中とり名　こうこうかひをて見も
こちうこに。後撰遣れひとりきくくうこうあちうこうこうこうきて三るまてこうこ
せさら　ふきぎかづき　蓬髪。方言。あやめこさうきかつきさうこつきあう
まし　ひちうれとこいせお。歳時記五月音皆蹋百草採女

懸杙戸上ハ　ふうひ　裝束。日 神代 あっひりひりいありうひ。ひ。ひ。

○良

ら　助辭。ゆくら。方言。ゆくらつよぐらたきてらもきめ。日いさめ。めきら。日
サうちたるそうの乃ぬら。。日十こ乃ちら乃曉作なくたつり。。日このよ
らハさ衣ふけぬらし。日十六仮名づきかへさぬ。こらも

らし　。らハ。てきく。ひて在字のさ之
。後紀宣命天皇我詔旨良万止。乃良も助辭あり
てあってありをつめてうりそるこ以て日。。しハ既往を以辭之。方十無日地
に焼きこもをくめらし。てる地乃ういきつこてにらし。日八こうの吾あつ。天
にこひて。。さくらの花ハむ久へうらし。日十花風と山右こゆこ丁今乃ちゆをこう
アくもかくるらし。日一吉之て衣きうらし。伊之への衣さうりあり乃のくやま

らむ　らハ日上むハ況在をうる意辭をふるり。方十ちる。かも
わゐ仮をちるけ。しくも枕地乃花や方けくちるらむ。三紀美し

らひ
らひの釣りらんの釣ろ之。日神武紀いゆきまうらひ。いまりりし。方一かへらひめれ
ハ。日九かへらふれハ。日十六仮へらひ。。方。らくこ以もらふ日。。方ちら
くそくあくふらくのれけき。日十九とこちらくハ弟をちこころ
。日十二れいらくを。。在乃ろうをもれのつうらふくめり

○利

アうきしはひ　カ士傑く。方十六他と乃アきしまひうも伝説の梓くひうちて乃ろ
ちらむ。日特後紀二年十月皇太子率公卿百寮人等無諸蕃賓
客適殯宮而恸哭焉於是奉奠奏稱節傑諸臣各筆己之祖等所仕狀遊
進誄焉。日敏宗紀天皇遣作殊傑自任右禮之立出傑立出此之陀豆之傑狀者左記
左右而傑。紀記ニ稱節傑今之吉之傑ニ
手小稱為ニ記度故者。。これらの仮あへ

○冠　○禮　○呂

ろ　助辭。。方二ろ。めろ。ハろ。。きろハ。。日十六書ろのわさを右下を次ろ。日
十四あを祢ろ之。。日十九ちるへさくふちろうらえ乃うらやゆよさねしよう
なきころをしたと
へハ。そかれれ

○和

わ　助奉之。日神武紀烏到其營而鳴之曰天神子召汝悔過云云又磯城名之
曰。方三うるはしきとゝろ神書系ことりてといきわ正てうむこゝさけハいちう
回えたわゝ先れわをりよ。方一にさわにいらこう後こしゝにものさらんうあゝき宮
わを。日わられあてこひてあれいわひろむ五りくまわよあゆへわせ。日七やゝ
しくもゝちくゝしほう法乃去はきしの濱わえ約まゝまを。日拾ろいうわよぞわハ
かつきはるゆへとやたちまたひ行わまを。日うゝやゝちゝき里わをゝゝゝけり人う
つくゝひきつりゝみに。日上
ゝちゝわえゝちくゝしほあい

わかせ　今津之。方十六さ次ゆへゆわせゝゝいち
わつりひちゝよりこむきつよあむさゝ

つゝらた　今之らたハ助奉之。宣命ゝこゝのら海。方五かへらまゝものらハらまえ
日しわきてゝいゝとゝへる奉ちるへし。方七わくらたゝ人とうあるをゝゝ
。日九人ゝちるこゝハかゝきをつゝらたゝちれるつ光ハ死ものいい

わくこと
。去今つわくらたゝゝ人あハ法ゝのゝゝにを拾ゝれつわゝゝゝへよ

わゝき　難波之。方十三ゝ穴ゝ枕の萩ゝいこひうゝ

わざ　療業之。方十三あをれ
きいくゝゝしかきわゝゝ。ろかも　ほゝわけゝゝよまれ
ひえををええられしわさうつひゝりぬる。日十六あらをゝらハつまゝよわさをむと
れ次ろゝしつやゝせをまてゝきまさぬ。日八つゝゝつゝるゝい。ゝちちゝゝゝゝ

もはしわざ　越之。方四今のゝこのわさゝ
ゝゝゝ

わさ　わさうゝ。日十九いにしゝよありけるをろゝ
けてたちらむ枕たきのうきわゝらゝよれけるゝつ四。日五ゝ
ろゝわけさうれゝ。ゝらハたわゝらハのゝらのゝしわいあふゝゝゝ日し

わしまて
走出ゝ山ろゝれ出てしれをりよ。方二わしを出の拾ゝ。日十三わしを出のゝろし
きやまゝ。日雄略紀ゝうりくのゝゝをせの山いてゝちのゝろしき山わしを出のゝろし
きや

わしむ　わしらせの男波之。日元業紀あしひきの山田をつ
まゝ　を山ゝるゝ寺ひをわしせゝとひえ去ゝつまゝ

わ次らせれ
勿令忘之。方十二わきゝ子やあをわひらゝを。日二わひまてわりへや
。四わをまたまふゝ。日七わゝれけらしし。日十三わゝらえぬ的も。日四わハわひきし
。日神代　たきつりかもつくしまにわろぬね

わしいハわひらるよりこと〳〵を

わと　為之。方三ゝゝくゝもふりゝゝ雨ゝ
ゝわゝききのゝわゝりに家ゝあら
ゝに。催ゝ楽山しろりこま

わる　。方四ゝゝわゝゝ人ハ羊ゝもゝゝをゝゝ。日十三
羊わゝるまてにち人ハゝとよをゝゝ。日土ゝけ
ひろわゝゝ。日十二ひわゝれゝゝゝ。日九ちつきひわゝわ。日六夜わゝゝきけ
と。日廿氷わゝゝる。日わゝる日はうけにきゝ保いてゝつゝてなきよきゝ乃

まことあ
もむる わと 世し。日神武紀曲浦。わとのまわる宮し。万一さちとし乃志のの
わつきもちらし 別名初しつい志。万四ものそつる わぼわと乃えは
つ乃こと。万一ゆきをる日おくれよけるわつきもちれし。日土
いろ日の入わきそ乃に。日十 わび 惑し。万四ものつとわひをるときにて。日た
喜雨のめるわきそ乃に。 ゆとい志わひ〜ミセ先と。日男ひわひて
日わひ〜〜ゆと。日十五 わそひわあれてぬるゆ〜うれほき。日う〜ふれし
日〜う〜の約わくまわふれをわひとゆいひ〜し。古上日子遅神和歌五。古字
わひ〜らにき〜らふくき〜あ〜ひきの わきてくゆけて 破而推而し。万土
やまのかひあるけわそやあ〜ぬ わむ。日六われて
ゆ〜け わ 我し。古上いまろいわゆ〜ちゆ〜めのちいなゆ〜りにあ〜んをゆし。万十六わを
てゆし 先ひらめやあきらけくわそ志るすをゆ〜人とわを先ひら先や先ふ
きゆしわそめにらえや。日四いて 先ひて。古下ひけゆのわそゆ。ひ〜ちゆ〜へ
わきえに。日土わをまちかてにゆし わうゆ〜へ ゆゆてまゆ〜ゆのれいゆけるかも。万十六い
ちゆくをつちゆ〜ひをゆのゆこゆくゆの先わう わうゆ〜へ 先ゆ。万土たいぬゆもまゆ〜わ
きうへゆさねゆ〜ゆらえも かへ先 先をゆ〜まゆむ。日六い

むつめのゆわつ〜へゆり〜。ゆれゆふをちかつゆとゆもむへきゆ。万五わさうわつゆくゆちぬ
をゆ〜ゆゆくゆわゆもむゆもまゆとをちめやゆも。日をよゆむゆゆわゆえもよゆゆやゆ〜いゆし
きわつ〜まゆ〜ゆをちぬ〜ゆ。日六もゆ〜ゆまわ人のゆひゆくる老人の変ゆゆゆゆ老ゆあふる
きのゆ 弘日言美濃国多賀行宮し。後紀 宝亀元年十五月丁酉朔癸丑天宮と居軒
詔曰朕以宝亀元年九月到美濃国不破行宮。留寺 教曰因幡国多賀山美泉
自盟手面皮膚如濯赤洗痛愛無不除念在朕身其験又就而飲之俗之者或
白髪反黒或頭髮更生或闇目明自余病疾咸皆平愈昔年後漢光武時酒泉
出飲之者痼疾平愈符瑞書曰醴泉者美水養老益気之精也寔惟美泉也即矣
瑞朕維庸虚何違天貺方大赦天下 改宝亀三年為養老元年。
わうけきバ 美在ゆ。万五わけきバちゆ
ゆ。日後伝紀ひら きられまひはせむゆ乃つひた
ひてゆ〜ほらせ。日十六伝ゆ〜ゆ〜ゆ〜

脇狭ゆこ。方三わきたさむ子のちく

ゑにとりわくよ。よしなけれくゝ わぎも 音略こいの約きゝ。日仁徒紀はし

たりこれはやんむしろも。古下わきへよハをゑつらゝくもろさやのまさつこわきしく

にへらこられ。方一わきもをもたやゝ流風やまとちるわうまつくはきふうさるふゆめ。を

かいこれはし わし 。方十六 ちゝとての終末のやらに考きをのたゝいるわゝ。日え

ゝにふゝ ゝたてのくまきさうやにまぬらるやつこわゝさはろちみてき

なまゝをまぬら わけ 。万四 吉男ハわけをゝ志ぬとおゝ。日八男のゝえむやわけさ

るやつこわし へよゝよ。日吉男よわけハうゝん。日戯奴 ゑ わま ゑのあるもも

をきまゝ。たたうをきよゝる わぬ。方廿六男のゝこゝかゝこゝ出ゝれハわぬゝかつ

ゑゝとゝるわゝとゝへるゝちゝし きていひゝこちゝも。ぬゝにと迫吉ふ紀

わゝりゝり 流字し。方十わゝりゝとり為わゝセをゝとふゝこ立のいゝゝらぬかさよ

かちのおゝゝやぬ。日わゝりゝとり舟ゝやわゝセ一ゝゝにふゝゝひかゝふ

男ゝあゝちゝに。日流字舟ゝ一りてむゝ布むゝこれゝてのちハあハゝ

ゝのかも。日流字舟あかさむやもゝちゝハありまて。ゝふたるゝゝろゝふし わらハ 小吉 三方

セゝのをうゝさゝうゝわゝらハゝちゝちゝかりろ有ゝて男ゝふまきむゝるゝゝもむ

日吉わゝらゝもゝゝるハをかりゝわほゝてゝをゝほゝつゝのあゝろゝわきゝさをゝれ。日土わゝらゝこ

ゝきゝる老人ゝゝて。日大老人も女のわゝらゝもゝ

。日三かゝきゝりゝとひゝるゝちつまむたわゝらゝものゝこと わきとわりひて 。方土あも

ハゝゝゝゝゝゝ日花われゝ男ひてまきてさぬまセ にとしわを

。日四われゝゝちゝて人ゝちゝりゝか。けゝろハ指笑ゝ わきちゝに 吉ゝ先ゝ。方七さ

あまハわれちゝにゝちゝりゝた なゝとゝろゝろ乃

ちゝちゝりゝちゝみゝゝにゝも わけかゝに わきふゝちゝくゝゝ。方四わゝちゝをゝ

にもゝれちゝけかゝに。日三吉方ゝゝのちゝれほゝう 乃女男ひゝるゝ。あハゝ心ゝもゝ

きめゝこのつゝてゝちゝまゝへゝるわきちゝけちゝくゝに わきくさ 。方十六 わらゝゝゝもゝ男

てをほつゝこのあゝちゝわきゝくゝきをゝあきを ハちゝうゝちゝやほゝと

。腋臭をわきゝをゝかゝてゝゝゝゝゝれゝちゝり わう 吉ゝ。方八わゝちゝをゝの枯ゝ枯の花風をゝりゝゝ

。日八 腋臭世ゝあゝハゝてゝあれハゝゝ。日六 。日土わゝれゝやゝかゝゝりゝむ男ゝや其ゝまゝきゝむゝゝ

ゝを考ゝら朕ゝうつゝ成ゝりてゝゝ わゝりセ 流郡ゝ。日仁徒紀ちゝゝやゝひゝゝちゝ

乃わゝりゝゝよゝりゝちゝたゝてゝゝあ

つゝゝゝちゝゝゝ。方十ゝのかハゝゝゝのわゝゝうハ わゝつゝ 海祇ゝ。方一わゝつゝ乃世ゝゝゝ

うつゝゝハゝゝ。日一わゝちゝゝゝゝぬゝゝゝりもけて ゝに入日ゝゝゝゝよゝひゝのゝくゝよ

あゝゝゝけゝくゝゝゝ。日三わゝゝゝゝハゝゝゝまゝゝゝりゝゝゝゝむゝゝひゝゝ。日十六わゝつゝゝの為の

いゝちゝゝゝ。日十九わゝつゝゝハあゝゝゝゝゝよゝゝゝゝゝゝゝゝ。古上伊郡那美命比海祇名天祇

はえ命い。和名抄重即
ゆ祈し。和大豆美乃加美

わさ

和田しロ分田をりよ。方七位のえのをと
からはる姉ともちゝ如あれし姉うこと

わにさのにを

和名抄土し佐ハ麦を大和語と為和名抄れよりうきを
田をる。古伊いちひかのわきあ土をもつ入いちこあら
らけ

わうを

吾行し。日土さ佐ハのえかとれるわをこわろ里ゝこれハれこひえん
ゝゝ

わ一

やも。日八ろとのあまのかりよ和わゝこよひう君ろわり為まさむ
。日土あつゝのあたきつきちすゝさ了ちても妹ゝりゝいもゝちぬこえこむ。日十妹の
里と馬ユゝら為ていこまむこて。日土つ了かゝとゝいををうつゝ。日九妹ゝらう
ていまきのゝゝ

わうゆつる

美能約し。方五わうゆつるまつらの川のかえなゝし
れうゆの茶こゝゝ乃ちゝに一もりゝわゝこひめやも。日まつら川
むゝきのゝゝにわゝもつゝいゝら

わ一

能るし。方十四つゝちねよわ。ちゝわ一の
をゝらむひとのやゝりゝさ

ねのゝをゝきゝわゝりちゝむあゝゝふな

一に。日十六きゝゝにの二王山よわ一ゝうまゝむゝいゝさ一ゝなも君ゝこね

わきべ

みわ一ゝうまゝむゝゝゝ。日九わ一の佐つゝゝの山ちもえきつのゝはのゝへまゝ
世ゝ多ゝかいの約きし。日景約能ゝきよ一わきへのかゝゆゝるわゝちゝゝやまと
ふのまほゝらまゝこ。日仁佐能あをゝ一ゝをゝきをゝてやまやまゝをゝ

きわゝゝゝ了一むかつきたゝゝやわきへのあゝゝり。方四さほわゝゝりわきへのえ
にゝくゝゝりの。日五うりの花わきへのゝのゝのまきてちるゝ四。日六ちゝのわきへをわ
ゝれてれ

わゝくさ

美奈之。方十ゝゝのにひたまゝらをまきゝあてゝをやゝて
ゝへや

むにゝくあ一取くゝ。日三わゝくさのつゝゝこ。日三わゝくさをゝゝり
ちゝハ地ゝこ。日仁賢紀古者八弱奈夫婦放八弱奈夫。伊

わゝきのう

むさ一地ハけハ方やきゝうわゝくさのつゝもゝゝりわきもゝゝれり

花

美樹樹し。方八ゝゝゝ乃ゝいゝ一てゝゝゝ一わゝやゝのゝゝあハ花さきにけや
。日四うめ乃ゝ知いまゝきゝゝれ知くいゝわゝしやも。日わゝきのゝゝ知ゝいまゝふゝゝ

わう花

維布し。方十八角一まのやゝゝ

わさ田

わもゝハ和名藻。和名藻味苦鹹之毒毒途末米俗用和布ニ
早田し。方七ゝゝふゝゝわを田をふ美ゝもゝゝゝにゝへよゝゝゝる加。日八さゝ川のゝを
ゝきわけてゝゝゝ一田をかゝるわさゝひハひ一ゝりゝゝる一。日十をゝゝゝら約あいのわをを
かゝゝゝきにゝゝりよけゝ一も為のむ受。日年ちゝ和をゝゝりへゝ乃い一ハ加と田わをかゝ
ゝゝきゝゝぬこ一ゝゝゝゝら一も。日十四にほゝりゝのかつ一ゝわををに一にゝもゝのかゝ知一きを
とにゝゝて

わさほのかづら

早稲鬘し。方八わゝまけゝるわさゝゝの稜ちつゝゝゝくゝ
ゝゝも

かつゝゝゝて一ゝぬゝをわゝを日わきゝゝゝゝりゝと

れる社の四方のさかつらなれ〜あるぬうも。方丈記戦場つちぬをぬき山ろを
をこりて或いはこうわの田舞る祈りて花物をいろひてほろこをつくる〜。ほく
こいか
つらこ わらきぐれ 萱ふるこ。一方四わきれくさわらこ編るはけくれ〜思のこ
こ〜有り。日十わきれくさ拾もこ〜にこ〜れ〜
〜このこ〜ろ〜ちほこ〜ろ。日三わきれくさわら編るつく番々しのわ〜〜をを
わらきぬうため。日土わろやうのはきのこ〜と家れひくれ〜こ〜ろきれ家これいまこ
れひいに。和萱草一名忘憂 和須礼久左。
考古浮雞草〜〜注萱草令人忘憂 わらび 蕨〜。方八いこ〜しこまこの人のこ
わらひをえ出る其にこりにけ
る わも。和薇蕨 和良比 初生無葉而可食良之崔禹錫食経云白者
畠蟹黒者曰蕨紫者曰綦置熟湯中令熟然後可食之 わこ 綿〜。方三こら
ぬひのつくこの
わこ〜〜ろつけていまこはきねこあ〜〜かこ〜。日五こ〜ひこの
いへろこもろきこ〜ろ〜〜ひつらもむきぬわこらもも わひきがひ 花貝〜
もこにこ〜わいこ〜〜いこきあ〜ふひろひてゆもこ。方六わ
こ〜こ〜ひわきれかひ。日土きのむのあこ〜らのこきのわひきかひわきはわひれ羊
かれこも。日土わこ〜〜に被こへめれて花貝拾へこ〜と焼はわこら生こ〜れ。日一大
はのこつ〜ろ〜こわきれ貝家こ〜。妹をわきれておこ〜へや。ここのこつ〜〜き貝

をひろひこくさこてうきをつきこ〜と〜ふこにこ〜わきれ貝こ〜ふ〜こ〜こ。土佐
日記こ〜ろ〜きわのをはこ〜ふこ〜こ〜こ〜こ

ゐ祢てむのちハひゝはかゆゝしゝ。月雄略紀いくゝゝけいらゝハゆゝゆゝみゝけたゝ
にハゐ祢ゐのちくゝみぬむろのわりひつあゝれ。方四くさまくゝちゝひゝハつゝハゐゝ
きゝゝちゝこのゝちちるむこうれゝをほゆ。月五ふゝれきてわれハこゝのむゐさむう
ゆゝゝにゐゆきてあまちゝゝゝゝ先。月十四かぬてやらきね。月十九たゝらけくゐてか了
まセゝ。伊いとゝらき　ねまちづき　若狭月ゝ。方三ゐまちつきあゝゝの門ゐゝゝ
にゐてゆきけゝゝ　。十八夜を元狭月十七夜をまち月十
九日を伏狭月十日を　ね　み。方七あゝひすゝさゝえゝ思ろほゝしゐのゐ井の
ねまち月ゝりゐゝろ　えハのゆゝくゐりぬゐも。月十九えゐゝゐの八十のいゝらゝゝゝ
まゝゝちゐみのゝゝへの　ねて　井堤。方十むゝかるゐゝのゝゝゝゝゝ八きゐもゝのゝゝゝる
ゐゝゐのゝのゝゐ　わゝゝろかも。月七ゝつゝ川ゝゝゝゝゝゝゝをろセをもやゝゐて
ゝゝゝ流の音乃さやけゝ。井堤ゝハ河のゐを　ねちゐ　田舎。方三むゝゝゝろゐに
切ゐゝにせき入むゝてゝ川をせき切をゝてゝ　えゐちゝゝいゝゝけめい
まハゝやゝひき　ねのこ　猪子。日孝紀　あをにゝゝちゝのゝさまにゝゝゝとのゝ
ゐひゐけ　つゝへこゝとゝゝちゝゝくゝゝゝひのゐゝゝをあゝゆゝつゝゐぬ
乃　ねくひつゝ　垣杭衛。日應神紀　ねゝゝひつゝかゝゝゝえのひゝゝのゝゝけく
こ　ちゝゝゝゝ。ゐをやゝゝゝゐゝゝゝを井せゝゝゝを思ゝて井ゝゝゝ

今ゝ発家ゝゝゝゆゝゝゝゝゝハ祝ゝゝゝゐハゝゝゝゐゝゝゝゝゝゝゝ

うちうちきくもきこゆ。後撰紀うめやなきつぬりてこそ

しきさくえまひひらけてうぐいすとこそあらそ。

女令嘘樂如此者乎こし。古上 樂。日雄略紀 皇太后視天皇悅 歡喜盈懷〻。古

語拾遺云何由誠之言樂とのたまふ。万十九 浜きくとよもすらん

をらひ 淘汰え。万サ ゆくさきに浜のまをらひをりく

にはるをらひ事をらひきてらをきぬ

分にをくの浦ををり。或説云ををまをまををはををくくひををををはをくくはをを

はを蘭のえを似て生さく芋有てををくくはををくくはをををを

○万六ちりとなるたきつかり常たくまへてわろわろ〳〵君ちよにもかも。日たくまへてわれをたゝへ〳〵。日たくゝみりへをうたまへわきゝ。日四たくゝもいゝあむ。源氏うたくまりかゝる山住ちゝもせてゝ。人をたくゝかゝくたりつゝ之もゝ〳〵

たくゝ　奚処之。万国処。菱百墓石と書

たくゝをゝ〳〵山ゝえてきゝゆゝ。日十二会きてゐ侯ちきゝ付ゝ天中のたくゝを忘ちに言てゝをる。日たくゝちゝく言ぬ山侯をゝ。日十三をゝらくのたくゝを言ゝに。

○たくのゝのり言きぬゝよ

たくる　後之。万二たくれあてこひてあゝにハたひゝもたのゝまわとやの山ゝたゝ〳〵まをゝ。日五たくれあてちゝをひゝに

たくる　送之。万五あまえゝのよのゝめのちちゝあもちゝまゝゝゝのを

ふやをにもかゝやゝやゝまてたくりまをゝてゝゝひゝるゝの。日五わきゝゝゝゝにきゝゝたくりをゝるゝゝろものひゝをまゝゝゝゝめやも。日九あゝひきのあゝ山ゝたくりたきてかゝゝよゝ

うれゝゝゝろ

たこセ　○万十八言ひひいほつはゝゝにをにむをひたこセむあまいむちゝるゝゝも

ゝゝもあるゝ。日十九紅のゆゝほゝゝめてたこセゝゝゝゝものをゝハゝほりてめれあ

たくて　○万八言てちゝちゝきゝてゝゝよちゝほゝちゝけり　訳晩菜ま就ちゝ

晩稲をも打くゝてゝゝハたゝくちゝるゝのをたくゝてゝいゝるを

ゝへゝ。侯ゝゝゝと枝めを

ゝをたくのゝてゝいゝゝゝ

たこ　拳動ゝ。日之紫紀わゝちこゝゝゝへきゝちひちり

たこてゝゝゝめよ　押駐之。万六ゝゝまのあゝゝ打ゝてゝゝめよ侯のえの

さかひのりゝゝのたこちひかゝ称てゝゝ

たゝ

ゝめゝゝ

たさへ　柳ゝ。万廿あゝゝゝゝまりるたさへのゝ

堤駐ゝ名曰之媒。日天武紀紀ゝ祭文

たさへさ沢　○万十三やまゝのつけのをゝ

たさへ言言言

あらしわ
らえや　**たろろし**　畏し。方七　ちはの浦はれろろしそれも神をたむけて船をもはいるよ。日あふこの海信濃とは寺年えやへ
なむこくふちにに。方二　やひをとわくきけるをやとかさにわれを。ほかーとと山路ろ　**たろ**　鈍し。方二　かへりれろのえひを。日九　とえにをむへきろを
つるきくちわろろれろやその男。日十二　石四のよわるそろれろくい。源ときこ
むうなきふうおうのかりさやーのこーろれろくー。日ろひちろやーーにほこ
風りれつをれりひかけぬろー　**たろふる**　押振し。方十　をとめろちにやいくをたろふちひわをくれひこつちひわう
なれれくろりりくれたろさよ　**たろ**　ふ殘りをえ古上　しちえるーえ八
たくれはい。方十四　くれろこのやりーれろうるりつをし
にわうをやりていくあこのを。神へ方十六　**たち決**　しちえるーえ八
ときをれかきえるいろのときれちれい。方九　三川りふをもれちれさてさほよこ
ろーてあれぬほれまはなーに。日十五　むくひぬて一日もれちれえーくもいとをぬ殊
を月わるまて。日一川くりりの八十くまれちれちろてひかりえーい。日十七　ぬるたち
にいかろうれとい。日十二　ひ夜もれちれいちれろりり。日十五　一夜やれたちれいめ
にーえ
ある　**たと**　青し。方十　たくーーりまるのりくをれくえやいをりるくりのあのりえよ
あるぬ。日十八　さりれるあまのかちれとゆくりかにいれりえよのりるける

かも。日十四　つむりれにまくうれとなるかかむちを　**たなー**　日十八　又れやーくも。方十九　あま
りくのくちりーゆりりまりーも　さるひるくーあれはりるる古
くもれちくりりりえさくりりまのくゆけい。日四　こりちりむりりきもれちーり
。日十五　れちくくれれてをれれとい。日天智紀　をちちれれはれのりえくくれれ
きくくむよぬくくきれやーゆよぬく。方十四　ひくくくぬきけきまりりてまをりも
りれやーまくらはやはまくーやも。日十六　妹われりをりはれやーい。日十七　れ
きはい。日十九　**たのともたのや**　各しし。方十七　りふりりりあけまえれふか
らもれやー　きはれのもれのやうーせつきくり。たのもく
くくう　**たのうーじい**　各うさまくくし。嘉吳自物語自まの犬自まのの自をりて
嘉日　わるるくちし。方十二　各うーくくうさまくらーー妹まをひ日に
けにややぬ人ーちえれ。源もくひあ浦のあちーもりちりあかりりれのりりさ
つるこまくてい。あえまはやくくら枯はまりきりの家りの花れのりーくこりりしー
かり　**たのちをのる**　さ名告ス。方十　ぬりりりの海のあわりりりりはれほりりふいくよ
けて　をへてりれのりりりをのる。かりりこりりのかかくくきこ
ゆれはかくくりり。後拾遺かへりくくりりりり

わのうとぐわり。方七三ちゆにのゑのうををうりわのうとうわ
あいまとかゝねと。は六いやひとりむのまかみさひ

わたぬるのかも 不負者と。方四まゝらをの思ひわひてあまゝひなけく
なけきをわりぬるものかも。伊九〜つけきゝ〜のうゑ
うゝたゝよよにやあつむわりぬるものにやあゝむ今とうゝうゝうゝな
る。涙きりぐゝ〜みをむつゝりにやゝゝ。詞花わ歌てあゝれとわゝぬ
山のあにさにむよちる

わたゞセる 帯にせるゝ。日後拾紀大弓のたいセるさら
うゝをひのちけきハ うゝれひりむきひゝれたきやゝひゝも
えゝてゝなけゝ。方九ゝゝうの神のわれりをるちをけゝ。は七え
宮ゝ山りわひある細殿月。更級劉敬列伝 秦地殺山帯才河

わび 佩ゝ。方十三
あゝへゆ
くかちの翁をゝるゝに宮ゝれゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜わゝは四。は十
紅ふゝれひつけなゝ〜罪ゝ〜にてゝをひるけと入をゝゝれ

わゝ 負と
方五わ
ゝけきハゝちゆきゝゝれまひハやむりを生のゝゝひれひてゝほゝセ。は十三ちゝり
かゝゝんよわゝをゝるまゝうゝかゝゝにれゝきつひきれひ生ゝちて馬ゝのゝわゝセ。は廿
れひゝやのゝゝ〜ゝゝる。方三所の名をひゝ〜ゝれひゝいゝ〜へりわはは
まてちけきつゝかも

わゝ は。方三
きひゝ〜ゝりゝゝゝ。は五ゝほゝひゝは

つゝさゝひちつま為ゝひきゝうりゝ〜ゝりれへる山のゝ名。は九ゝ
ゝむゝの四まてにハ山れゝの瓜なふきゝゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜

ふちのきにくひたほれるくろうかつらちゆうとなくこやつくせむ。花まち
あくきをいへるエ　そのを　ものまかーらいくとくてはほくきくをとこ
らて　**はほる**　大方こ大体ち根ちとふくーー。方十二はほくこはなくを
こ　こひむくー。古今ちくるの秋くるかるに家物ころかかるを
この〜鳥ひ　**はほ**　**きる**。日神代　俊徹。方七　伊むをなにもまうにてくこ
こりぬれ　のくにはけやくーへくるくまはほれそる
はほ　覆く。方十よちくちりれあくるりれはほよちる宮のいちしくく
もくひむわきかも。日ふるりれはほよちる宮のいちしくく
のつえのはほひえのくー。日二むくるけ
はほよをちくくあけてるの家くしい
はをほ　所念之万集　**はほ**　生く
ちやくにからあのつとはよーかきぬれくこりはそ又もまうむくるりよ。日サ
まひーーてきくうはほやるなてくーこう花のしとそむ実ちくるくに。日三つくませ
にはるを家きぬくろちいまと　御物く。書紀こなひくのるのかに
きくーていろにいそにけや　**はほ**　先つるふちくるま君れはほくるのたを
ア〜〜　**はをぬ**　不男く。方四　はるくぬをはるよ
けふ　くくくくー万集中いくをー　**はるほき**　思恋く
。方十三　れ

とはーきくーつてむやくくー　**はを一ア**　思恋く。方四　この家ふーちに
。ア俤をはるをーきくーー　はるーー。日はるーーをし
。ちはきをー　**はをどち**　思恋く。方五　うめの花いまさくりちりれよよ
くくよくく　とちかさくーくていまさくりちり。日八
くくちちちちちきくくをーくはるーちち　**はをろき**　怜悧く。日　書紀
あくるくくひいちけはもあくーぬう　やまくえてうくわ
ハくくるはるくーろきいまきのくちいわちちゆまーに。方十四　はるーろきれをは
きくろふるくくにはひくるくさまーーをはひいはるーかに。古語拾遺　高御産巣日神
天初明清傳　右文面旨ぬ心伸ゑ　家相共様曰功後礼言天地
功成礼成志ー〜古語拾遺之切皆様言の数言宗面白ー。霊異記　**はを**
ひやる　遺問。方五　たひくーーあきいれくひやるくるくをくにー。日はくひ
やるまくーーのたくきもいまいぬくーくー考像のきくくふたくを
はをひあまり　思偏く。方七　はるくあまりくるをくちくくきまた
きくるぬひのるくくまくくるくあゆくはくし　**はを**
ひくぐれ　思恋く。方九　あくーかきのはるひくくれてくー。日十三　あくーきのはるひ
くくれてくー。日十三　山をけのくくくれてひのくくー。日十三　山をけの

わらひ〜
たれて　たよづま　妖し。万三れよ
○日本代　哭声。万九　けひわらひあ〜
て　きり〜きう〜たけんて〜
そふ万らのありうのえり　れろ
うれとあうんけそ　いかにつ
けこう　たどろきて　驚し。万四
○万四ふかしこきかこきーそれいうれとかるこひあいまとあいちくに。月六むし
りひとのいひくるえんのわうもふまうえるれよ原のセ。月四こうちくあり
う〜ふをたいうすにに〜。月十八えんもの〜いこもて福ひ〜。月九たいつ
くあうこ〜。えれ分こ添ふれよつけとりあるほ〜。万四百〜やにれいこいてくこむ
ふ〜。月十六たいんをたうり〜車をてかりこ〜。月十三れいらく。月十六れいえ
てぬ〜い。月十二ひうこ〜もるたいひとまーしてい。和書宮私話を布流抄巻五〜
おきなさび　後進し。万十八　ちりふくろうれうとうぬちりやろいまくえ
てーつたきるさひセむ。伊れきるさひ分るくめうかりころも

百九十七

けふそうりとうこつも
ちくくちりる。霊異記窟窕　たくつる　奥あこれくるれとふつとこ。万十七　あうれ
るをこるへーあるわつら　くつまいちる。社伊勢物語　おのれくつまるを
ハーしんをてうれろ　わのつま　自ら。万十四　おのつーをひの里えおきて
行のえりをつのよいてこうてるもれのつりをちらをかえくこつも。月十二たのつりこころとこ
先つーしき。月十天地やめーはやれのうつーちくもにあるわきまつれい。月九れの
つりか　たくらくハ　性良し人之名。万三れくちくいまいまくむ子をくらむ　れとひ
きてこ　うのまのたくもわきこをゆとむろ。自のえをくちり
をとめ　乎姫し。々伝ふもえ子をさーてれくひといへすいこのをこちる。日歌家
紀　オトヒヤツコ　第日奴曼し〜。万一　わらんはちきまつりをこのえれれくひ
をこあとこれと　れほき〜　天皇又諸王。万一やにこーーつ大毛。ふくふーほそく
あうぬうも　ぬのこ地こ〜。月十八　大男よまちちまあいこ。月山ひえ系む
に。うえすあひをこつくかもも大きこ乃人まこ
大人米月えこし。古伊拾遺　仍使大使を組天皇日命卿本月部を組大梓伊大本日常使
米驅。日本代こつくーくあうこちうこ。万十八　大使乃ーほつ祁れやろのえをい

大久米とかとおひとちて〻い

○日太ためのまくらさけをい　**おほたくら**　大工。古下おほたくらをちなく

たらーきわをくのゆくこかけーをこちい　こうをこかふけも。日雄略紀わ

ちちなけいーれちかけむよちとらをこちい　**おほみやびと**　ちなく人。万さ派

きくちれーとちーやひーの舟まちかぬつ。日十ーしきのちこやひといこまあ　乃ちのかちさきた

きやうめをかさーてうにつ〜〜と。日土さんこけのちこやひ〜いまちかと人ちわ

のここのここくこく。こん行の　**おほうをとめ**　臣之娘子。日仁徳紀こちうこ

太こやちーてういへとちむい　おほこをとめをこれやちく

む。万おこうのめのこけこ　**おほ**　母。又乳母ともいく。万土ことりこのこめこう

のれこかこんちに　ちちにをこむちのめや男ちれちくくむら

む。日くやーくも光ようけるかもちちきこうをこもる乳母ようちーこのを。日十ちも

やふる神のこさこうぬさアつりいくこいのちいれちちこうあ。日うこちもちこう

こりつきちくこちをおきてうきこぬやれちをーよて　**おほ**　面。万十九

○日神代　乳母　湯母　○日神武紀　母方邑　馬飼母　和　姑母　桃花紀

にーはひこうおちのうちにちれの日ほうき屑板をこ。日又ちはーこれちの自に

佛面謂之美於毛和。日れをちり月のこてるれちの。又れちこれてても。万土れちか

たのちまるとちーくれちきちくここ。日十四あっれちのつちれむーくくくくふり

神まこつやをこてこすをセ。日十二ふくこるくきのをうれちをを久ーれちちここら

うこくこぬこのこち。日八ちちやまのこのてかーこの　**おほ**　面。万十

ふこれちてかまをかくにもねちけひこ乃こも

四いこれちるうあくる何さくれもかくーこる。六帖ねくくれのおもの花れきちる面

かくーてこてぬ男くれ。内則女子出門必擁蔽其面こ。万十むくこれれちかくー

ちるこのからにつきてこん　**おほなこ**　面。万十

まくのけーき男ちも　あーこれるちここ。日八ちひにあひてあ

ーたれちちこここ。伊勢ちちくくていくくいくるちくくーー。ほくこちち

れるちくくてかきこれるかき会セこるちちむこー。今伝面有ちこ　**おほや名づ**

ら　面。万十八こうの秋れこうーまこけこれ　**おほかこ**　面形。面子

いれるやを名つらーきこやこかこひこ　これるほし

○万土れちここのつれこるこちくくこれちきちくくこ。又面けくこも。万二みちのくのまの

よかやくくくけこもれちかけこーてこやくくちこのを。日四こくくひーさまれ

ちかけ　**おほ**　面。万土れちれこいこちここくこるこのこれい

にーて　**おほ**　面。万十れちくくこ。日面ちれくこれちこ

やくもにきりてうつ〳〵
こうばこひのやつこハ

わがたま 面易し。日本紀汝佐平名不易面来。続日本紀宣命日今日乃止賀乃
容世歌早星と云〳〵基い。方十二あしつのこしわまぬさまつりいとひてむとや
かつてまセ枕かりもて。日サいまセもち〳〵 ためうちかぶ。めとも通

わらべ 面不知。日皇極紀をとやにわまをいい
てや一人うかりてもこれ家ちをこれをや

わや〳〵 枕〳〵し。方十三訳

こうろ〳〵気ちをを〳〵。日八説書但訳〳〵三
飲楽聴許者〳〵。日久茶紀訳〳〵相新

わやのことろ 方八わやの子
〳〵ろ大仕と

仕伽のこちい人のわやの
さつこ〳〵て人のるい

わやのちをこ 日上訳
老〳〵紀

わこ〳〵 老〳〵しハ
老婆〳〵

。方五かくゆきい人まにく
まえわこ〳〵をいい

わむな 嫗し。和嫗於無奈老女之称。日敏達紀春日
臣仲君女曰老女君夫人〳〵。方二ふかにし

わむるまーてやかくたのり方つ
ろこと。漢字書わこるにちる

わきろのかゼ 息吹風紀
。方五 右丸山きかさちかるかちけ
くわきろの伽ゐきかさちかさ

わつるーゐ 震雨し。方八と
きまちてわつる

百九十九

ろれの面やてあきろの山のゐきちゃむちむ
。日十四つゐれのゐゐとろれつるゐ

わほゆき 大雪し。方二吾里に
わほゆきふまりわ

ほりのかにーきにかちまゐ
ゐふ後。日十九 右文の内もかもをつーゐれ

ゐゐゆきをゐろゐをーー。日二わほゆきおゐれてきゐれ〳〵

わほゐかし 大伽神し。方十九 右文の内の
わりわほゐかし舟の〳〵〳〵

わのゐし 霊鬼し雨雪の神し。日
神代伊弉諾之拔剣斬軻
遇突智為三段二段をあ三る霊鬼又云る神名曰闇霊〳〵。典紀凡土紀之球球
彩球覃村令飯泉之一郎在秋霊鬼謂れ面美〳〵。方二ゐをのわゐこに云
てふらーめー雪のくた

けーゐにちかけむ わき 日神代紀 わきまをゐ〳〵ふかれゐかまね
けし。日神代紀
とこことあゐゐぬゐもよたまちちかよ。方三ち
たつゐ乃奥ゐ物行てをちつゐゐゐ
わきこゐ〳〵あゐいゐかわゐし〳〵。日三八やをいつをのゐゐハきかちれやー〳〵みの川
乃奥ゐのちつゐゐ。日三かゐのゐにあ
ゐ川乃わきをふう先てわうわふ〳〵
柳をとかをちてこれハゐやこ乃ち
わほちハゆきをちとろやまみちハゆきあーーあるけを

わちを 大海し。方十九 右
乃日にえれる

わほ

を 大兵。吉下こもやくのちつセ乃山のれほをにいえとけりとてきをにいたる
けりとてれほをにしちうきとあるけりひつりあそれつくりのこやる
こやともあつさうをてりたてりも
のちもうりみなけりひつるありれ れほの 大川。方七ゆきくいこめやと
わりひしこしこ世れ大川
そくをけ
こつるかも れほの 大世。方七ゆうこりの吉乃ちせをやく れほきく
ひとくいやきそくぬかもわうこうろやく
こ乃ちら 大海之事。方六いちこ世乃ちほ乃ふよ之ぬ乃ふちあ乃くくこ
こもそお。日廿れほきうこけ
しくきうそくの里。日十七れほくくこのれくくもうくに
ゆくわれをいつきまきもむこ小こひしくこうちえ
さうのちわこうくむこもむくくの人こ又 れくくこと 夢乃夜。方十三れくくとこに世
きあをむやも。れわ乃ゆまあり 祢ゆ乃ゆ外ここに父八祢ゆち
れほうかと 大市門。方一日乃こて大市門ま二日のぬきの大世門ま
こくもの乃れほをかくにくに新こ大ゆとにく れほうや
大夜。方一天皇の祢のこくと乃ちえハこくくきけこと
日こくくきの大こやこ。日六かえるへうくひ大ゆやこころ れほきこと 大体門。日宗祢
れほきくこち

うかひてころさんくきらく
をこにひちうこひも れと 大門。方ろりこひのあくの れほむろや 大室
わくくいるひうやくく 至之
日祢武死 れさうのれほむろやにひくさよいさをわこもひをこえ
きいりをかこもこうくくあのこちらうついろていれうちてくやすむ れほてら 大
寺
方四 あんれりりぬ人をれりのかたちけ
紙鬼のちりくにぬうつくうこと れくつき 奥御。方六大体乃こほつ祢れや
乃れくつきハちるく標ち人のこる
へく。日九あくやりうちんをこめうれくつきを体寿こえてハぬのくくちる。日
三かつくうけまくのてこちうれくつきをこくくきけこと。日ちれゆくこつ人くもつけ
むかつくうけまくのてこちうれくつきをこころ。日むくくこころ外も
くくうちきこころれくつきこれくくれけくき体寿山 れほよの 大菊
方十九
大このくこのくくほかの宮ちふこうぬこ。日十三 れほひも 覆ねく。方十天皇や
れほのくくきりちくくにつ田れひてくくどうお
れけりくくこりてう
くくこりれくくん れほ祢 大根。和菖れ保祢俗用大根之字根白而了食之。日
仁徳死 つきねふやまくろめりこくいをちうちくれほ
祢ちりさりくこちういくちこううちりくんちくこえちんきいこまりねくれ。日つまねくや
まくろめけさくくハこちうちくれけけもねくくけけちうたくむきまりけけこうちれ

[illegible]

たほねぐさ 大薗[illegible]。方十四かしつけりいちゝのぬまのたるくさようにて[illegible]
[illegible]

たそひぐは 。方十三ちのへの[illegible]
[illegible]

たそひ 。方十[illegible]

たそひ 鬱[illegible]。日仁[illegible]

たびときかへ

たびつのむ 織[illegible]。方七かつ

[illegible]

たるえ　織機[illegible]。方七[illegible]

たきうはに 市馬[illegible]。方五[illegible]

たほぶ孫 大舟[illegible]。方十五[illegible]

たくぬさ 置幣[illegible]。方三[illegible]

櫛乃嬬手下終

和歌露分衣

全部五冊

橋本稲彦大人著
加納諸平大人閲

古風の和歌後ゝ[illegible]
哥文ふるき[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

揖取魚彦著

嘉永四辛亥年暮秋日

大阪書肆

南久宝寺町五丁目
伊丹屋善兵衛

本町貳丁目
奈良屋長兵衛

發行書肆

江戸
須原屋茂兵衛
須原屋伊八
山城屋佐兵衛
和泉屋吉兵衛
岡田屋嘉七
英大助
永樂屋東四郎
阪本屋喜市郎
蛭子屋市右エ門
田中屋治助
河内屋喜兵衛
秋田屋
奈良屋

名古屋
若山
京都
大阪